

わたしは此時全く考へやうがなくなつて、自分自身までも變な氣になつた。

「それや、いくらあるにはあるが、彼等の境遇も大概似たか寄つたかだ……」

私は連交に別れを告げて門を出た時には、まんまろな月ほもはや中空に上り、極めて静かな晩だ。

四

山陽の教育事業の状況はあまり香ばしくなかつた。私は學校に來てから二ヶ月にもなるが、月給が一文も入らないので仕方なしに、煙草まで節約した。だが、學校内の人達は月給十五六圓の安職員でありながら、一人として天を樂しみ、命を知らざる者はなかつた。彼等は次第に叩き上げて仕上げた鋼鐵の筋骨を手頼りに、顔は黄ばみ肌は干枯らびても、朝から晩まで仕事をおツとほし、ときたま身分のある人が來ると、其處へ立つてペコ／＼お辭儀をし、全く「衣食足つて禮節を知る」といふ教へなどは此處では必要のないやうに見受けた。私はかうした模様を見るにつけ、なぜかしらん連交が別れ際に頼んだ話を思ひ出さずにはゐられなかつた。あの時はセツパ詰つて、苦しさを色をとぎ／＼現はし、見たところ、昔のやうな落ち著きもなかつた。わたしが出

發すると聽いて夜中に訪ねて來て、しばらくもぢ／＼してゐたが、やうやくの事で言ひにくさうにキリ出した――

「どうかしらん、向うに何か方法がありやしないかと思ふ。――早い話が筆耕でもして一月二三十圓の金でいいんだがね。僕は……」

わたしは腑に落ちなかつた。まさか彼がこんなに身を落さうとは思はなかつたから、一時言ひ出す言葉がなかつた。

「僕は……僕はもう少し生きなくては……」

「向うへ行つたら様子を見て、屹度出來るだけ都合してみませう」

これはわたしがその時二つ返辭で引受けた話だが、後ではしよつちう自分の耳に聞え、同時に眼の前に連交の人相が浮び出し、言ひにくさうに

「僕はもう少し生きてゐなくては……」

もうこんなにて経つて仕舞つたが、わたしはいろ／＼心配して各方面に推薦してみたが、何のしるしもなかつた。仕事は少く人は多く、結果は頼んだ人から、お氣の毒様といふ返辭が來るので自分も亦お氣の毒様といふ手紙を書いて彼に送つた。一學期の終りが來ると形勢は迎も悪くなつ

て来た。その地方の有力者が經營する「學理週報」の紙上にはわたしの攻撃が始まつた。もちろん名前などは出してゐないが、言ひ廻し方がいかにも上手で、わたしが學潮の煽動をしてゐることが、一目見て感づくやうになつてゐる。さうして連交推薦のことまでも芋蔓のやうに見做されてゐる。

わたしは據處なく身動き一つしないので授業の外は門を閉めて躲れ、時に煙草の煙が窓の隙間から洩れても學潮の煽動になりやしないかとびくびくした。連交の事などは尙ほ更おくびにも出せない。こんな風ですつと冬の半になつた。

丸一日雪が降つて、夜になつても未だ歇まない。屋外は何もかも静まり返つて、静けさは静けさを聞き出した。私はさゝやかな燈火の下に、目を閉ぢてぢつと坐つてゐると、雪の花はひらひらと颯り、見渡す限り果てしななき雪の置場に、いやが上にも降り積るが如く見えた。故郷では年越の支度をして、定めて急がしいだらうが、わたし自身は子供に返つて裏庭の平らな地面に一つの小さな仲間と一緒に雪圍摩を作つた。雪圍摩の眼には二つの小さな炭を嵌め込んだので、顔色が甚だ黒い。それがチャリと動くと、忽ち連交の眼に變つた。

「僕はもう少し生きてゐなくては……」

やつぱりこんな聲だ。

「なぜね？」私はわけもなくこんな問ひを發して忽ち我ながらをかしくなつた。この可笑しさが私を現實に呼び戻した。私は坐りながら身體を伸ばして煙草に火を點け、窓を開いて見渡すと雪は果して大降りになつてゐた。誰かが門を叩く。暫くして、一人入つて来た。それは聞きなれたボーイの足音だつた。彼は此部屋の戸を開けて、六寸あまりもある大きな封筒を差出した。筆跡はなげやりではあるが、一瞥して「魏絨」の二字を認め、連交が寄越したものと知つた。

これは私がS城を出てから、彼が寄越した最初の手紙であつた。私は彼の疏懶を知つて居たから、「杳として消息なし」など何とも思つてゐない。しかし、たまには手紙の一本位呉れたつてよささうなものだと思つて居た。そこへこの手紙が舞ひ込んで来たんだから、わけもなく不思議に感じたのであつた。慌てて封を切つてみると、中もやつぱり書きなぐりで、こんな風なことが書いてあつた。――

「申飛……」

僕は君を何と稱したらいいのだらう、僕は君の名の下を空けて置く。君自身が好きな稱號を何とでも書き添へて置き給へ。僕は何でもいゝのだから。

お別れしてから、三本手紙を受取つたが、返事を出さなかつた。その原因は極めて簡単だ。僕は郵便切手を買ふ金さへもなかつた。

君は僕の様子を知りたいと思つてゐるかもしれないから、今茲に簡単に書く。僕は失敗した。以前僕は自ら失敗者と思つてゐたが、今になつてみると決してそんなことはない。却つて今が本當の失敗者だ。前には人もわたしをもう少し活かして置きたいと思ひ、僕自分も亦もう少し活きようと思つた時生きては行けなかつた。ところが今、あんまり必要がなくなつたら活きて行かなければならぬ……

それもさうだが生きて行かれるのか。

僕がもう少し生きたいと願つたのは、自分が即ち生きて行けなかつたんだ。其時もうこの人間は敵から誘き殺されたのだ。誰が殺したのだと？ 誰だつて知りはない。

人生の變化はかくも迅速なものか！ この半年以來、僕は殆んど物乞をするところだつた。實際もう物乞の部類に入つてゐるのだらう。しかし僕には未だく仕事がある。僕はそれがために甘んじて物乞をした。それが爲めに餓ゑも凍ゑもした。それが爲めに淋しくもなり、それが爲めに苦勞もした。しかし滅亡はしたくなかつた。ねえ君、僕がもう少し活きようと思ふ一つの願ひ、

その力はこれほど大きなものであつた。ところがそれも今は無くなつて仕舞つた。此一つの物さへ無くなつて仕舞つた。同時に自分は生きてゆくのに不都合ひのやうに感じた。他の人はどうだつて？ 他の人だつて同じことだ。同時に又わたしの生きて行くのを願はない人達のために、意地になつても生きてやらうと思つた。いいあんばいにわたしの幸福を願ふ人は死んで仕舞つたから、もう誰にも心配を掛ける氣づかひはなく、さういふ人に心配をかけるのは、僕だつて厭だ。何しろ今は何一つ無い。愉快だ。のび／＼した。僕が以前憎悪したところのものも反對したところのものも一切やつてみた。そして、僕が以前崇拜し、主張したところのものも一切排斥してつた。僕は本當に失敗した。——けれど僕は勝利を獲た。

君は僕が氣狂ひになつたと思ふかね？ それとも英雄か偉人になつたと思ふかね？ いやいや、話は極めて簡単だ。僕は近頃杜師長の顧問になつたんだよ。月給は毎月現ナマで八十圓とは素晴らしいだらう。

申飛……

君は僕を一體どういふ代物だと思つてゐるね。君自身で規めるがいい。僕はどうでもいいのだから。

君はまだ僕の所の昔の客間を覚えてゐるだらう、我々が市内で初めて會ひ、また別れもしたあの客間を。今でも、僕は未だ此客間を使つてゐる。そこには新しいお客と新しい贈物と、新しいおべつかと、新しい取り入りと、新しいおじぎとあいさつと、新しい麻將と拳と、新しい冷眼と胸の悪さと、新しい不眠症と吐血がある……

君の手紙だと、教員生活も甚だ面白くなささうだ。顧問生活でもやつてみる氣にならんかね？ わたしに頼めばすぐ世話して上げるよ。實のところ門番だつて構やしない。同じやうに新しいお客と新しい贈物と、新しいおべつかがあるよ……

こちらでは大雪だ。君の方はどうかね？ 夜が更けて二度許り血を吐くと眼が冴えて來た。秋以來君は手紙を三本も續けて寄越してくれたがこれはどうも驚くべき事だ。僕は君に一寸した便りを出すのは必要だが、それがために君を味氣なくさせることもあるまいと思ふ。

今後は大概もう手紙を書かないだらう。僕のかうした習慣は、君もよく知つてゐる。何時頃歸つて來るね？ もし歸りが早ければ、また逢へるかも知れない。——しかし、僕は考へると、我々はずつたり同じ道の者ではないなあ。若しさうだつたら、どうぞ僕のことなど忘れ給へ。僕は眞心から君が僕の生計を御案じ下されたことを感謝する。しかし今はもう忘れて呉れ給へ。僕は現在

『好く』なつたんだから。

連投。 十二月十四日

これは決して「味氣なく」させられはしなかつたが、一寸目を通したあとでもう一遍よく見なほして見ると、結局あまりいい氣持はしなかつた。しかし又同時に愉快な上機嫌なところが多分に雜つてゐる。想ふに、彼の生計は最早問題でなく、わたしの重荷も卸されたが、此方面に就ては自分は終始無能だつた。直ぐに返事を出さうと思つたが、別に書く程のこともないので、其考も立ちどころに消えて仕舞つた。

私は慥かに彼を忘れるやうになつた。私の記憶の中にある彼の面影もそれから始終出て來るやうなことはなかつた。しかし十日程経つとS城の學理七日報社が、忽ち續けざまに彼の新聞を寄贈して來た。わたしはこんなものはふだん餘り見ない方だが、わざ／＼送つて來たんだから手當り次第に擴げてみた。これが又彼を想ひ出す種となつた。そこにはいつも彼に關する詩文があつたからだ。例言ば雪夜連投先生に謁すとか、連投顧問高齋雅集とか、そんなやうなものが、——又一度こんなこともあつた。學理閒譚の中に、以前彼の笑草として傳へられたことが、名前も「逸聞」と變へられて禮々しく掲載され、「且つ夫れ非常の人は、必ず能く非常の事を行ふ」と云ふ意味が言外に含まれてゐた。

なぜか知らんが之れに因つて彼を想ひ出し、彼の面影が次第に薄らいでゆくにも拘らず、わたしと密接の度が日に増し加はるのであつた。往々わけもなく、自分にもえたいの知れぬ一種の不安と極めて軽い戦慄を感じるのであつた。いいあんばいに秋になると、此「學理七日報」の寄贈は止まつたが、反つて山陽の「學理週刊」には毎號一篇の長論文「流言即事論」を掲載し始め、其中に「某君等の流言に關しては已に公平なる紳士の間に喧傳され」云々と書いてあつた。此指摘された若千人の中にはわたしも含まれてゐたので、わたしは只管大事を取り、例に依つて吸ひ出した煙草の烟が、四邊に飛ばないやうに注意した。大事を取るといふことは一種の急がしい苦痛で、それが爲めに、何事も手につかず、もちろん連爰の事など思ひ出す暇もない。つまり、正直のところ、わたしはもう彼を忘れてゐたのだ。

さうしてわたしも亦夏休まで持ちこたへることが出来ず、五月の末には山陽と切り離れた。

五

山陽から歴城に行き、又太谷へ行つて、ぐるつと廻つて半年餘り何の仕事もめつからずに、又してもS城に歸ることに心を決めた。時は春の初め、午後の空は降つたり止んだり、一切は灰色

の中に罩められ、もとの家にはもとの貸間が空いてゐたから矢張りそこへ落ち著いた。途中で、爰のことを思ひ出し、到着後、晩飯のあとで行くことに規めた。私は聞喜名産の煮餅を二包さげて、濕つぽい道を大分歩いて、往來に寝そべつてゐる犬をいくつも避けながらやつとのことで連爰の門前にたどり著いた。部屋の中は殊の外明るいやうに思はれた。人間も顧問になると、貸間の中まで明るくなると想ふと、わたしは黒暗の中で一笑を禁じ得なかつた。併しよく見ると、門袖の紅紙などは皆取つてあつて斜かひの紙が一枚貼つてあるのが目立つた。私は、大良達の祖母でも死んだのだらうと思つて、門を跨いでづかく中へ入つた。

微かな光に照された中庭には、一つの棺桶が置いてあつた。傍には軍服姿の兵卒或は馬丁かもしれんが一人立つてゐて、も一人のひとと話をしてゐた。見るとそれは大良の祖母であつた。その外ぶらりと立つてゐるのは裨天着の荒ツぽい人達であつた。私は胸がギクリとした。心臓は忽ち跳り出した。大良の祖母は忽ち顔をこちらに向けた。

「おや！ 貴郎はお歸りでしたか？ もう二三日早かつたら好かつたのにね……」彼女は忽ち大聲を出した。

「誰が……誰が亡くなつたのですか？」わたしは實はもう感づいてゐたが、知らず／＼そんな問

ひが出て仕舞つた。

「魏大人が、昨日お亡くなりになつたんです」

そこであたりを見ると、客間はひっそりとして暗く、只一つの燈火があるだけだが、母屋の中には白い幃帳を掛け、外側に集つてゐる子供を見ると大良や二良達であつた。

「佛様はあちらに置いてあるのですよ」大良の祖母は前へ出て指さした。「魏大人の御出世後は母屋の方をお貸し申したので、今でも其處にお寝かし申して御座いますの」

幃帳の上には格別のものもなく、前には長テーブルが一つ、角テーブルが一つ置いてあつて、角テーブルの上には御飯だのお茶だのが十ばかり供へてあつた。わたしが門を跨ぐと忽ち白い長衫を着た人が二人出て来て欄りとめ、死魚のやうな眼を光らせ、げげんらしく私の顔を腫めた。私は慌てて、自分と連爰の關係を説明し、大良の祖母も側へ来て、證明して呉れたので、彼等の手と眼の光は次第に弛んで来て、私が近くへ行つて鞠躬の禮をすることを默許した。

私が一つ身を鞠めると、地べたの方で忽ちおい／＼と泣き出す者があつた。よく見ると一人の十歳許りの子供が蓆の上に坐つて、これも亦白い著物で、頭を短く刈り、頭の上には太い苧麻絲の房が絡みつけてあつた。

禮が濟んで彼等と話をしてみると、その内の一人は連爰の従兄弟で、血統が最も近く、もう一人は遠縁の甥に當ることが解つた。そこで故人を見たいと請求すると、彼等は極力阻止して、「どうぞ致しまして」の一枚張であつたが、たうとうわたしに説服され、白い幃をまくし上げた。

私は死んだ連爰に會見した。お、何と云ふ奇怪なことだらう！ 皺だらけの襦袢とズボン下がたつた一枚だけで大襟には血痕が附著して居た。顔は瘦せかけて見るに堪へないが顔付は矢張り前のやうなあの顔付で寧ろ靜かに唇を閉ぢ、眼を合せて睡るが如くであつた。殆んどわたしは彼の鼻先に手を出してみたくなつた。探つてみたら實際未だ呼吸があるかもしれない。

一切は死のやうな靜けさ。死んで仕舞つた人も、生きてゐる人も。靈前を退出すると、彼の従兄弟も側へ来て應待した。「舍弟」は、今が働き盛りでこれから先きが肝腎なのに、遽に「物故」して「一族」の不幸は申すまでもなくお友達にも非常な悲しみを掛けました。といふところは、言葉の外に意味を持たせ、連爰に成り代つてお詫びをしてゐるやうであつた。こんな旨い言ひ廻しは山家の人には滅多にないことであるが、しかしあとでは沈黙して仕舞つた。一切は死のやうな靜けさ。死んで仕舞つた人も、生きてゐる人も。

私は逆も淋しくなつて、どうしたものか、悲しみさへも起らない。そこで中庭に出て、大良達

の祖母と無駄話を始めた。納棺の時刻が近づき、經緯子の到着を待つてることや、棺桶の蓋をす  
る時には「子午卯酉」年生れの者は避けなければならぬことや知った。彼女は調子に乗って話し  
出し、泉の流れるやうにまくし立て、彼の病状を語り、彼の生前を語り、聊か批評がましい言葉  
も加はつた。

「貴君は魏夫人様の運が開けてからのことを御存じでせうか。人柄は前とはコロリと變つてお顔  
も高く持上げてそれはもう氣位の高いこと、人に對しても前のやうなあんな薄ぼんやりしたとこ  
ろは更（さら）にありません。貴郎も御存じでせうが、あの人は以前は丸で嘔（おし）のやうでわたしなんぞに對  
しても老太太と呼んでゐたぢやありませんか？ それが後では『老惚れ』などとお呼びになるんで  
すよ。あい、あい、それやもう本當に面白いのですよ。よそから仙居朮（貴重薬）を送つて來る  
と、御自分は召上がりもせず庭に放つたらかして——それが丁度此邊——『老惚れ、食べろ』と  
被仰（おつしや）るのですよ。運が開けてからは人の出入りも多く、わたしは母屋を譲つてあのお方に住んで  
戴（か）き、自分は此袖部屋に引越しました。あのお方は全く一足飛びに出世なさる質（たち）で、世間並（せけんなみ）の人  
ではない、とわたしどもはいつもかういつて笑つてゐるんですよ。もう一月早く貴郎（あなた）がおいでにな  
れば、此處（ここ）の賑（にぎ）ひを御覽（ごらん）になれたのに、三日に二度はお酒盛りで、拳（けん）を打つやら酒令（しゆれい）が始（は）まるや

ら、喋（しゃべ）りたいたい者は喋（しゃべ）り、笑（わら）ひたい者は笑（わら）ひ、詩（し）を作（つく）つたり、麻雀（マージャン）を打（う）つたり……  
あのお方は前には子供を怕（おそ）れて、子供が親爺（おやぢ）の前（まへ）に出（で）た時（とき）よりもつとみじめで、逆（さか）も氣（き）が引  
けて大きな聲（こゑ）で物（もの）も言（い）はなかつたんですが、近頃（ちかごろ）はガラリと様（よう）子が變（かは）つて能（よ）く話（わ）し能（よ）く騒（さわ）ぎ、わ  
たしところの大層（たいそう）などあのお方（かた）と遊ぶ（あそ）ぶのが大好き（だいじ）で、閑（ひま）さへあればお部屋（へや）の中（なか）に入り込（こ）むので  
すよ。あのお方も亦（また）いろいろな面白（おもしろ）いことで子供（こども）を引止（ひきと）め、何か買（か）つて呉（く）れといへば、子供（こども）に狗（いぬ）の  
啼（な）き聲（こゑ）をさせたり、コッソリと一つ、瘤（こぶ）の出來（でき）るほどのお辭儀（じぎ）をさせたり、ハハハハ、本當（ほんたう）に賑（にぎ）やか  
なことでした。二月（ふたつき）程（ほど）前（まへ）二良（にりやう）が靴（くつ）を買（か）つて戴（か）いた時（とき）にも三度（さんど）額（ぬか）づいたんですよ。今（いま）穿（は）いてるのが  
それで未だ（まだ）破（やぶ）れません」

白い長衫（ながさき）を着（き）た人が一人（ひとり）出（で）て來（き）たので、彼女（かのぢよ）は話（わ）を止（や）めた。私は連爰（れんしゆ）の病狀（びやうじやう）を訊（たづ）ねたが、彼女は  
よく知らなかつた。「身體（からだ）が瘦（や）せて來（き）たのは前（まへ）からのことで、それを誰（たれ）も氣（き）がつかなかつたのは、  
あの方が大層（たいそう）な御機嫌（ごきげん）だつたからです。一ヶ月（げつ）程（ほど）前（まへ）になつて、初めて血（ち）を吐（は）いたといふ話（わ）を聴（き）  
きましたが、別段（べつだん）醫者（いしや）に見（み）せるでもなく、其後（そのご）どつと寢（ね）ついて了（しま）つて、死ぬ（し）ぬ三日（さんじつ）前（まへ）には喉（のど）がすつか  
り枯（か）れて仕舞（しま）つて一言（ひとこと）も言（い）へません。十三大人（じふさんたいじん）は遙々（はるか）寒石山（かんせきざん）からお越（こ）しになつて、あのお方に貯  
蓄（ちく）があるかとお訊（たづ）ねになつたが、一言（ひとこと）の答（こた）へもないのです。十三大人（じふさんたいじん）はあの方が空（そら）ッ惚（とぼ）けてゐる

のぢやないかと疑ひを掛けてゐられましたが、人の話では肺病の人は聲が出なくなると申します  
が、まさかねえ……」

「でも魏大人の氣癖は逆も變積なんですよ」と彼女は急に聲をひそめて語り出した。「あの人は貯蓄などをするのは大嫌ひでしてね、水のやうにお金を使つて了ひます。十三大人はわたしどもが何かいいことでもしてゐるやうに疑つてゐるんですが、何の糞ツ、いい事などがあるもんですか？何でも無理無體に無茶苦茶につかつて仕舞ふのですもの。譬へば買物をして、けふ買ったばかりの物をあすは賣拂ひ、蹶倒されることなんか一度やそこぢやないのだからねえ。死んだ後では何一つ残つてゐません、みんな使ひ枯らしです。それでなければけふだつてこんな淋しいこととはないのです」

「あのお方は本當に出鱈目で、眞面目なことは一つもお考へにならない。わたしもさう思つたからお勧めしたことがあるんですがね。その位のお年頃になつたらお家を持つのが當前です。只今の御様子だと縁組はいとやさしい。若し相當の家柄がなかつたら、先づお妾さんを何人かお買上げになつてもいいぢやありませんか、人は誰でも身分相應にするのが當前です。さういふとすぐに笑ひ出してお仕舞ひになり、『老惚れめが、そんなことは乃公以外の人間に考へてやることだ』と

被仰るのですよ。ねえ御覽なさい。あのお方は近頃は只もう、うはくして人の好意を無にしてゐなさるのですよ。これが若しわたしのいふことを聽いてゐたら、現在たつた一人ぼつちで、手探りして冥界に行くやうなことにはならなかつたでせうに。少くとも、親身の人の泣聲が聽かれただせうに……」

商店の小僧が一人、衣服を背負つて入つて來た。身内の者が三人、裏衣を引出して幃の後ろに進んだ。やゝあつて、幃が掲げられると裏衣はもう著せ更へてあり、引續いて外衣を著せつけてゐた。これはわたしの思はくの外であつた。カーキ色の軍服のズボン、それには極めて廣い赤線がついてゐた。身體の上の方に著せたのも軍服で、金ピカの肩章は如何なる等級であるか、何處から貰つたのか知らん。棺桶に入れられると連発は彼として甚だ不似合に横たはり、足の邊には黃い靴が一雙置かれ、腰の邊にも細工物の指揮刀が置かれ、瘦せこけて骨許りになつた枯木のやうな黒い顔のそばには、金筋の軍帽が一つ置かれた。

三人の身内の者は、棺桶のそばに連れられて來てしばらく泣いた。泣き止んで涙を拭ふと、麻絲をかぶつてゐた子供は退出した。三良も亦退出した。多分これは「子午卯酉」のいづれかに屬するものであらう。



人足は棺桶の蓋を荷つて来た。わたしは側へ行つて永別の連袋に對し最後の見收めをした。彼は不似合の禮装の中に、靜かに横たはり、眼を合せ、脣を閉ぢ、口元には氷のやうなつめたい微笑を含み、この可笑しな屍を冷笑してゐるかの如くであつた。

釘打つ音がゴツンと響くと、泣聲も同時にとつ走つた。わたしは此泣聲を聽いてゐるのがいやになつて中庭に退き足に任せてゆくうちに、覺えず大門を出た。濕つぽい道はハッキリと眼の前に現はれ、空には雲の跡方もなく、頭の上にはまんまるの月が一つ、いとも靜かに、冷やかな光りを散らしてゐた。

私は早足に歩いてゐると、一種の重苦しいものの中から衝き抜けて来るやうであつたが、衝き抜けることが出来ない。耳の中には何か抜け出ようとしてゐる者があつて、しばらくして、遂に抜け出して来た。それがどうやら遠吠えの如く、傷を受けた一疋の狼が夜更けて曠野の中にさ迷ひ鳴くが如く、痛ましき中にも憤怒と悲哀が籠つてゐる。

わたしはやうやくホツとして濕つぽい敷石の街路をゆつたりと歩いた。月光の下に。

(一九二五年十月十七日)

### 傷ましき死

— 消生の手記 —

若し私にできることなら、私は自分の悔恨と悲哀とを書き下して見ようと思ふ、子君のために、自分のために。

會所のなかの片隅に忘れられてゐる破屋は、こんなに靜寂で空虛である。時の流れは本當に矢の如く、私が子君を愛し、彼女に依つてこの靜寂と空虛から抜け出してから、はや一年を経過してゐるが、成行はこんなに拙くなつて、私が再び來て見ると、たゞ空つぽの一軒のこの家があるのみで、相變らず、窓は破れ、窓際の槐樹と古い藤の樹は半枯れになつてゐる、窓下には相變らず四角なテーブルがあり、壁は破れ、壁際には板のベッドがある。夜更けて、獨りそのベッドに横はれば、私がまだ子君と同居しなかつたときのやうに、過ぎ去つた一年の歲月は全く消滅して

ゐるものの、全く経過しないやうなもので、私がこの破屋から引移つて吉兆胡同に希望に満ちたさうやかな家庭を創立した事は、丸切り無かつた事のやうである。

それのみではない。一年前には、この静寂も空虚も決してこんな風ではなく、いつも期待に満ち、子君の来るのを待ち構へてゐた。久しく待ちあこがれてゐる中、敷磚に響くハイヒールの音を聞き出した時には、わたしはどれほど俄に元氣づいたことか！ そこですぐに眼の前に現はれるのは、あの壓を湛へた眞白い丸顔と細りした臂と木綿の立縮の衫子と黒いスカートで、彼女は又窓際の半ば破れた槐樹の新芽を持つて来てわたしに見せ、外にも未だ鐵のやうな太い幹の上に房々した紫白の藤の花が掛つてゐた。

さうして今は？ たゞ舊のやうな静寂と空虚があるのみで子君は決して再び来ない。しかも永遠に、永遠に！……

子君が私のこの破屋にゐないときには、私は何を見ても目に止まらない。何もかも詰らなくなつて、手當り次第に一冊の本を引きずり出し、科學でも好し、文學でも好し、どうせ何だつて同じだから読み下してゆくと、読み下してゆくうちに、ふと氣がついてみると十幾枚もめくつてゐた。しかし本に書いてあることは何一つ覚えてゐなかつた。耳ばかりが格別に鋭敏になつて門外を通る

すべての靴音が聞えて来た。其中には子君の靴音もあつてコト／＼と次第に近づいて来た。――併しそれが次第にほのかになつて遂には他の足音の雑沓の中に消えて仕舞つた。私は、子君の靴音でないらしい布底の靴を穿いてゐる芝居者の子供が憎らしくなつた。私は又子君の靴音によく似てゐる、あのいつも新しい皮の靴を穿いてゐる、雪花膏を顔に搽りつけてゐる隣の小間鼠が憎らしくなつた。

彼女は車の上から投げ出されたにちがひない？ 彼女は電車に轢かれたにちがひない？

私は帽子をとつて、彼女を見に行かうとした。しかし彼女の叔父が面と向つて私を罵つたことがある。

忽ち、彼女の靴音が近づいて来た。一步々音がする。私が迎へに出たときには、もう藤棚の下を通り過ぎ、顔には微笑の笑くぼを浮べてゐる。彼女は未だ叔父の家から、嫌はれてゐないらしいので、わたしの心は落ち著いた。黙つて顔を見合せたのも束の間で、破屋の中にだん／＼充滿したわたしの話聲は、家庭の専制を語り、舊慣の打破を談じ、男女の平等を語り、イブセンを談じ、クゴールを語り、シエレーを談じた。……彼女は絶えず微笑み點頭き、雙の眼にはあどけない好奇の光が漲り溢れてゐた。壁には銅版刷のシエレーの半身像が釘で留めてあつたが、それ

は雑誌から切りとつたもので、彼の最も美しい一枚の肖像畫である。私がそれを指し示して彼女に見せてやると、彼女はチラリと見ただけで、羞かしさうにうな垂れた。此點は子君も未だ舊思想の束縛から抜けきらないのであらう——私は後で、シェレーが海中に溺死してゐる記念の肖像か、或はイブセンのものにとり換へた方がいいと思つた。しかしたうとう取り換へないで今になると、それすらどこに行つたか判らない。

「私は私自身の物です。何人も私に干渉する権利はありません」

これは、私どもが半年交際してから、彼女がこゝにゐる叔父と家にゐる父の話をはじめ時、彼女が暫く黙想したのちに、明白に、斷乎として、沈靜にいつた言葉である。そのとき、私は、私の意見、私の缺點を少しも隠すことなく言つてしまつて、彼女もすつかり理解してゐた。その言葉は、非常に私の靈魂を動かし、その後久しい間、なほ耳のなかで響いてをり、またいひやうもなく嬉しかつた。そして、支那の女性も、決して厭世家がいふやうなそんなにしやうのないものではなく、遠からぬ將來には輝しい曙光を見るであらうといふことが判つた。

門まで彼女を送り出し、いつものやうに十歩あまり遠ざかると、いつものやうに、鱗鬚の老慍面が、又しても汚れた硝子窓に吸ひついて、鼻先までも小さな平面にひしやがれた。庭先に出

ると、いつものやうにまた、すき透るやうな硝子窓のなかのあの小間鼠の顔に、厚ぼつたく塗つたクリーム。彼女は脇目もふらずに、傲然として歩み、それが見えなくなると、私も傲然としてかへつた。

「私は私自身の物です、何人も私に干渉する権利はない——この徹底的な思想は、彼女の脳髓に、私よりもより一層浸み込んでをり、非常に堅固であつた。少しばかりのクリームや鼻尖の小平た

いことなどは、彼女にとつては何でもないのだ。

私は、そのとき、どのやうにして、私の純眞な熱烈な愛情を彼女に表示したかを、もうハッキリと記憶してゐない。今でさへ、そのときは、ボンヤリして、夜になつて追想して見ても、只もう僅かの斷片しか残つてゐない。同居以後、一二月で、その斷片さへも追ふことのできない幻影と化してゐたのだ。私はたゞ、それより前十幾日の間表示する態度を仔細に研究したり、物の言ひ方の後先を排列して見たことや、萬一拒絶された時の用意を記憶してゐるにすぎない。しかしそのときになると、萬事無駄で、大に面喰つて我知らず映畫で見たことのある方法を使うたのである。後になつて考へて見ると、私は非常に恥しくなるが、記憶にはたゞこの一點のみが永

遠に残つてをり、今になつてもまだ、暗室のなかの孤燈のやうに、私が涙を含みながら彼女の手を握り、片方の膝で跪いた様子が照し出されてゐる。

私自身のことばかりではなく、子君の言葉や動作すらも、そのとき私はハッキリ見えす、たゞ彼女がすでに私に許してゐたといふことだけは覚えてゐる。だが、彼女の顔色が蒼白になり、後では段々赤くなつて——それは曾て見たことがない、其後も二度と見たことがない赤さで——子供のような腫に悲しみと喜びを示しつゝも、驚きと疑ひを帯びてゐるその光は、成るべく私の視線を避けて、あわてて窓を衝き破りさうであつた、と記憶してゐる。さはいへ私は、彼女がすでに私に許してゐたことだけは覚えてゐるが、彼女が何を言つたか、何を言はぬか、更に覚えがな

し。しかし彼女は、みんな覚えてゐる、私の言葉を、熟讀したやうに、滔々と暗誦することができ、私の動作を、私に見えない一枚の映畫が眼の下にぶら下つてゐるやうに、生きうつしに、非常に微細に物語り、全く、私が二度と追想したくない淡い電の閃きのやうである。夜が更けて人々が寢静まり、差向ひで復習するとき、私はいつも質問され、試験され、且つそのときの言葉をもう一度繰返すやうに命ぜられても、いつも彼女に補足され、訂正されなければならなかつたこと

は、丸で丁綴にある一學生のやうであつた。

此復習は、後では次第に減じたが、彼女の兩眼が空中を凝視し、失神したやうに沈思し、顔色が益々柔和になり、笑窪が深くなるのを見るにつけ、私は、彼女が舊い課目を自分で復習してゐるのだと知ると、私は彼女があつた可笑しな電の閃きを思ひ浮べなければよいがと思つた。しかし私はまた、彼女がきつと思ひ出すであらうし、また思ひ出すにはゐられないと察した。

しかし彼女は、決して可笑しいとは思はなかつた。私自身には可笑しくもあり、いつそ下品なことのやうに思はれたが、彼女は少しも可笑しいとは思はなかつた。それが私には非常にはつきり判り、彼女が私を愛することが、それほど熱烈であり、それほど純真であつたからだ。

去年の晩春は最も幸福であり、また最も忙しいときであつた。私の心は平靜になつたが、又別の心遣ひと身體が一緒に急がしくなつた。私どもはそのとき、道を一緒に歩いたり、また何回も公園に行つたこともあるが、最も多かつたのは、家捜しであつた。道で、時々探すやうな、嘲笑と猥褻と輕蔑の眼付に出會ふときには、氣をつけないと私の全身が縮まつて仕舞ふのだが、すぐに驕傲と反抗を引起して持ち直した。それなのに彼女は、一向無關心で、落ち著き濟まして悠々と

歩いてをり、全く無人の境を行くがごとくであつた。

家捜しは實に容易なことではなかつた。多くは口實をつけて拒絶されたが、少しは私達によくないところもあつた。最初私達の選擇は非常に苛酷であつた、苛酷にしなければ見たところ大抵私どもの安住すべきところではないやうに思はれたからだ。後では苛酷でなくなり、住へさへすればよいといふ風になつた。二十餘個所を見て、漸くのことゝで暫時間に合せの場所を見つけたが、それは吉兆胡同の小さい家の南向きの二間である。主人は御役人ではあるが、物判りのよい人で、自分は母家と袖部屋に住んでゐた。彼は妻と、まる一つにならない赤坊があるばかりで、田舎出の女中を一人使つてゐるのだから、赤坊が啼かない限り、非常に閑靜であつた。

私どもの家財は非常に簡單であつたが、それでも私は工面してゐた金の大半をもう使つてしまつた。子君は彼女の唯一の指環と耳環を賣り拂つた。私は一旦止めてみたが、彼女はどうあつても賣るといふので、私もそれ以上止められなかつた。彼女にも一株持たせなければ、氣が濟まないことが判つてゐる。

彼女は、その叔父ともう唾み合つてゐて、叔父は彼女を姪とは認めないといふほどに怒つてゐた。私も數人の友達があつた。自分では忠告する積りで實は私を性えさせ、または嫉妬する友人

と、引續いて絶交した。しかしそのためにかへつて非常にサツパリした。毎日事務が濟むと、もう黄昏に近く、車夫はきまつていつもユツクリ走るが、しかし結局二人差向ひのときが來るのである。私達は、先づだまつて互に眼を見合せ、それから心おきなく親密に話をするが、その後にはまた沈黙が來る。どちらもうな垂れて思ひに沈むが、それでも決して何か考へてゐるのではない。私も段々ハッキリと彼女の體、彼女の心を讀んでしまつた。三週間もしないうちに、私は彼女をより深く理解したやうで、ズット以前に理解したと思へたことが、今から見れば隔膜があり、すなはち眞の隔膜があつたことを暴き得たやうに思へた。

子君も日を逐うて快活になつてきた。しかし彼女は、決して花を愛さない。私が縁日で買つてきた二鉢の草花も、四日間水をやらないから、壁の隅で枯れてしまつたが、私もすべてに氣を配るやうな隙はなかつた。だが、彼女が動物を愛することは、多分官吏の奥さんのところから傳染したものであらう。一ヶ月も経たないうちに、私達の家族は俄に非常に殖えてきた。四羽の雛鶏が、中庭で、家主の十幾羽の雛と一緒に走り廻るやうになつた。それでも彼女は、鶏の恰好を見覚えてゐて、それが自分の家のものだといふことを知つてゐた。その外に、縁日から買つて來た斑の小犬がゐた、もと名前がついてゐたやうに覺えてゐるが、それでも彼女は、それに別の名前をつ

けてやり、阿随と呼んでゐた。私も阿随と呼んではゐたが、その名前は好きではなかつた。愛情はいつも更新し、生長させ、創造しなければならぬ、それは本當だ。私が子君とこのことを話すと、彼女もそれを了解して點頭くのであつた。  
おゝそれは如何に静かな幸福な夜であつたよ！

平和と幸福は凝固しようとした。永久にかく平和に幸福であらうとした。私達が會所にゐるときには、まだ時々議論上の衝突や意思の誤解があつたが、吉兆胡同に引越して来てからは、それさへもなくなつた。私達は、燈の下で向き合つて懐しい昔譚をしながら、あの衝突後、和睦が恢復してからの楽しさを振り返り味ふのであつた。

子君も竟に肥つて來た。顔色もよくなつたが、惜しいことに忙しかつた。家事の切り盛りで世間話をする隙もなくなり、まして讀書したり散歩する隙はなくなつた。私達は、どうしても女中を一人雇はねばならないと、いつも話し合つた。

このことは、私もともく不愉快ならしめた、夕方歸つて來ても、彼女が不愉快な顔色をしてゐるのを見るのが常であつた。殊に私の不快に感じたことは、彼女が強ひて笑顔を装つてゐるこ

とであつた。幸にして、あの官吏の奥さんとの喧嘩、その導火線が雙方の雛鶏のことであることを聞き出すことができた。だが、何故、そのことを私にはないのであらう？ 人といふものは、一つの獨占した家庭がなくてはいけない。こんなところに、住んではをられない。

私の道も、型に嵌つてゐた。毎週の六日間は、自宅から局へ、また局から自宅へであつた。局ではテーブルに向つて、公文書と手紙を書くことであり、自宅では彼女と差向ひで、または彼女を手傳つて、火を起したり、飯を焚いたり、饅頭を蒸したりすることであつた。私が飯の焚き方を覺えたのも、このときであつた。

だが食物は、會所にゐたときよりは遙に旨くなつた。料理を拵へることは、子君の得意ではなかつたが、それでも彼女は、その全力をこれに傾注した。彼女の日毎夜の心遣ひを見ては、私も同じやうに氣を遣ひ、甘苦を共にする積りだ。況して彼女はこんな風に一日顔に汗を流し、前髪を額にくつつけ、両手もガサガサになる位だ。

その上、阿随を飼ひ、雛鶏を飼ひ……、これはみな彼女でなければできないことである。私は食へなくてもよいが、そんなに働いてはいけないと、彼女に忠告したこともあつた。彼女はたゞ私を一目見たきりで口もきかず、どことなく寂しさうな様子を見せたが、私も口をきかな

いがよいやうであつた。それでも彼女は、なほも立ち働るのであつた。

私が豫期してゐた打撃は、果して到来した。雙十節の前の晩、私はボンヤリ椅子に腰掛け、彼女は茶碗を洗つてゐると、門を叩く音が聴えた。私は門を開けて見ると、局の小使が、一枚のタ イプライター刷の紙片を渡した。私は或ることを豫感しつゝ、燈の下に行つて見ると、果してか うであつた……

貴殿局長の命に依り爾後出仕執務に及ばず候也

十月九日

史消生殿

祕書局

このことは、會所にゐるときからもう、局長の息子の博奕友達であるあの雪花膏といふ奴が、屹度好からぬ噂を立て、何とか報告するに違ひないと豫期してゐたが、それが今になつて、漸く利き目が現はれたのは、もう遅過ぎる位だ。實際これは、私にとつては何等の打撃ではない、何故なら、私はもうとつくに、他に筆寫の口を求めてゐたし、また個人教授は少し骨が折れても、

少しは翻譯の餘裕もあり、「自由の友」の編輯主任は數回會つたことのある知人であり、二ヶ月前にも手紙が来てゐたからである。私の心はかへつて躍つたが、あんなに氣の強い子君が、顔色を變へたことはとりわけ私の心配であつた。彼女は近來少し氣が弱くなつたやうだ。

「そんなことは何でもないわ、ふん、私達は新しいことを遣りませうよ。私達は……」  
と、彼女はいつた。

彼女の話はずきないが、何故か知らん、その聲がたゞうはずつてゐるやうに聴えた。燈の光さへも、いつになく薄暗かつた。人間といふものは、本當に可笑しな動物で、極く瑣細なことにでも、非常に深刻な影響を受けるものである。私達は、初はだまり込んで見合つてゐたが、段々相談するやうになり、結局有金を極力始末して、一方筆寫と個人教授の求職廣告を出し、他方、「自由の友」の編輯主任に手紙を出して、私の目下の境遇を説明し、自分の翻譯するものを採用して貰ひ、この苦しさを助けて貰ふといふことに一決した。

「しようといつた以上、すぐしよう！ 一つ新しい道を切り開かう！」

私はすぐテーブルに向き直つて、香水の入つてゐた瓶と酸を入れる皿を片づけると、子君はすぐ薄暗い燈を持つて來た。私は先づ廣告文起草し、次に翻譯すべき書物を選択しようとしたが、

引越してから未だ一度も開けて見たこともない書物は、頭の方が皆埃だらけになつてゐた。最後に手紙を書くことになつた。

私は非常に氣迷つてどんな風に言つたものか知らんと筆をとめて考へ込んでゐたとき、ちらりと彼女を顔に眼を移すと、薄暗い燈光の下で非常に物寂しさうに見えた。こんな瑣細なことでも意志の強固な屈託のない子君に、かくも著しい變化を與へるものだといふことを、私は本當に考へ及ばなかつた。彼女は近來本當に氣が弱くなつてゐるが、それも決して今夜に始まつたことではない。私の心はそれがため更に亂れて、忽ち平穩な生活のイメージが浮んで來た、會所のなかの破家の靜寂が眼の前にチラつき、デツと見つめてゐると却つてまた薄暗い燈光が見えた。

しばらくして手紙も出來たが、それが頗る長文で、非常に疲れを覺え、近來自分も何となく氣弱になつたやうであつた。そこで私は、廣告と發信を、明日一緒に實行することに決心した。二人とも期せずして腰を伸ばしたが、無言の裡に、お互の堅忍不撓の精神を感じ、なほ新に萌芽して來た將來の希望を見出したごとくであつた。

外來の打撃はかへつて吾々に新しい精神を振ひ興した。局内の生活は、本來、鳥屋の手にある

小鳥と同じで、漸く餘生を繋ぐに足る粟はあつても、決して肥ることができない、日が経てば、羽根が麻痺して、籠の外に放されても、高く飛ぶことが出來ない。現在私は何は兎もあれ、牢のやうな籠を出て、これから新しい青々とした天空のなかを飛翔するのだ、私の羽根が羽ばたきを忘れぬうちに。

求職廣告は急に効果のあるものではない。また書物の翻譯も容易なことではない。一目して判つてゐるやうに思へても、一旦手を下して見ると疑問が百出して進み方が非常に遅い。しかし私は努力してやることに決心した、まだ新しかつた一冊の辭書も、半月にもならないうちに、その端に大きな眞黒な指跡がついたが、それは私の仕事の眞剣さを證明するものである。「自由の友」の編輯主任も曾て話したことがある、彼の主宰する刊行物は好い原稿は決して埋没しないと。

残念ながら私は閑靜の部屋をもたなかつた、子君も以前のやうに物靜かに、好く氣のつくものではなかつた、家のなかには、茶碗や皿が散亂して、煤が一杯で、心靜かに仕事をする事ができない。しかしそれは勿論、一間の書齋さへも作ることでできない自分の無力を怨むより外はなかつた。その上に、阿隨がをり、雛鶏をつた。雛鶏はまた大きくなり、兩家の小競合の導火線



になり易い。

その上に、毎日繰り返される食事であるが、子君の功勞は全くこの食事にあるやうに見える。食べては錢の工面をし、錢の工面をしては食事をしなければならぬ上に、阿隨を飼つたり、雛鶏も飼はねばならない、彼女は今まで知つてゐたことを、すつかり忘れてしまつて、私の構想が常にこの飯の催促のために掻き亂されてゐることに氣づかないやうに見える。それでゐながら一寸氣色ばんで見せても、彼女は少しも改めないのみか、相變らず少しも感づかないでムシヤク食つてゐる。

私の仕事は、定まりきつた飯の問題に束縛されてはならないといふことを、彼女に納得させるまでには、五週間も経過した。彼女が納得がついてからは、餘り機嫌もよくなかつたことは、いふまでもない。私の仕事は、それからは果して比較的迅速に進捗してゆき、間もなく五萬字位の翻譯が出来上り、たゞもう一度筆さへ入れれば、出来上つてゐる短篇二つと一緒に、「自由の友」に送ることが出来るやうになつた。たゞ食事の問題は、依然として私にとつては苦惱の種であつた。料理の冷たいことは構はないとしても、それすらも不足した、時には飯さへも足りないことがあつた。私は一日中家にゐて、頭を使つてゐるために、食慾は従前に比べて非常に減つたけれ

ど。それは先づ阿隨に食べさすからであるが、時には近來自分さへも容易に口にしない羊肉も與へてゐるのであつた。彼女の話では、阿隨は本當に痩せてしまつて可憐さうな、大家の奥さんはそれを見て私達を笑ふが、こんな落ぶれかたは堪へ切れない、と。

そこで私の残飯を食べるのは、雛鶏だけであつたことは、久しくたつて、やつと判つたことであるが、それと同時に、ハックスレーが「人類の宇宙における位置」を論定したと同じやうに、私は、私のこゝにおける位置が、小犬と雛鶏の中間にあることを自覺した。

その後、何回かの口論と催促の結果、雛鶏も次第に佳肴となり、私達と阿隨とは、十數日の間新鮮な鶏肉を味ふことができた。しかしその實、どれもこれも非常に痩せてゐた。それはすつと毎日漸く幾粒かの高粱しか食べてゐなかつたからである。これで非常にさつぱりした。だが子君だけは、非常に寢れ、いつも重苦しさで寂しさを感じてゐるやうで、餘り口をきくのも好まな

いほどであつた。人間といふものは、かうも變り易いものか！と、私は思つた。しかし阿隨ももう飼つてゆくことができなくなつた。私達はもはや、どこからも手紙の來る希望はなくなつた。子君ももうとつくに阿隨にチン／＼させる食物も持つてゐなかつた。冬がもう

間近に迫つてきて、ストーブが重大問題とならうとした。私達にとつては、犬にやる食物すら、非常に重い負擔であることは、極めて見易いことであつた。そこで、犬ももう飼つてゆくことができなくなつた。

若し犬に草標(草を十文字に結ぶ)をつけて、縁日に出して賣れば、何錢にはなるだらうが、私達にはそれもできず、またそんなことをしようとも思はなかつた。そこで、到頭、風呂敷を頭に被せて、私が西の方の郊外に捨てに行つたが、それでも跟いてくるので、餘り深くもない穴の中に放り込んで来た。

私は家にかへつて、非常にサツパリした気分になつた、だが、子君のうら寂しさうな顔色は、私を非常に吃驚させた。それは全く今まで見たことのない顔色であるが、勿論、阿隨のせゐである。だがどうしたことだらうか？ 私は、土穴のなかに捨てたことは、口にもしなかつた。

夜になると、彼女のうら寂しい顔色に、氷のやうな冷たささへも加はつて来た。

「不思議だね、子君、お前はどうして今日はそんななの？」と、私はこらへ切れなくつて訊いた。「何がさ？」彼女は、私を見もしなかつた。

「お前の顔色さ……」

「何でもないの、——何でもないことよ」

私は彼女の言葉や動作から、彼女が私を残酷な人間だと認めてゐることを見出した。その實、私一人なら生活には困りはしないのだ、剛慢で、従來世間と交際もせず、引越してからは、すべての知合とも疎遠になつたが、それもたゞ大きな仕事が生きてゆく道が却つて、それほど廣々したらう、今、生活の壓迫の苦痛を堪へ忍んでゐるのも、その大半は彼女のためであり、阿隨を捨てたのも、亦そのためである。それなのに、子君の考へは淺墓で、竟にこの點さへも氣づかないらしいのだ。

私は、或る機會を捉へて、その理由を彼女に暗示したが、彼女は理解したもののごとく、うなづいた。しかし其後の様子を見ると、彼女は判つてゐない、或は全く信じてゐない。

天候の薄ら寒さと心の冷たさは、私をして家庭のうちに安居することを出来なくした。だが、どこへ往かうか？ 大通りや公園内には、氷のやうに冷やかな心はないが、寒風は人の膚を刺して、つんざくばかりである。私は結局、通俗圖書館のなかに私の天國を求め得た。

そこは、入場券を買ふ必要がない上に、閱覽室には、二つの鐵製のストーブが据ゑてある。縦令

それが燃えてゐるか判らないほどの僅かの石炭を焚いてゐるストーヴにせよ、それを眺めてゐるだけでも、精神上、温かさを感じるのである。書籍には見るやうなものはない。古いものはくだらないし、新しいものは殆んど無い。

私が好んでそこへ通ふのは、本を見るためではなかつた。外に未だ常連が幾人もあつて、多いときには十数人にも上つたが、その誰もが、丁度私のやうに薄い著物を著てをり、銘々が銘々の本を見てゐるのは、火に當らうといふ口實にすぎなかつた。それが私としては最もふさはしいことであつた。道ではよく知つた人に遇つて、輕蔑の眼を投げかけられ易いが、ここにはそんな邪魔者はなかつた、何故なら彼等は、永遠に別の鐵製ストーヴを圍んでゐたり、或は自分の家の素焼のストーヴの側によりかゝつてゐるからだ。

そこには私の見る書類はないが、却つて安閑として自分の思索に耽ることが許された。獨り寂しく坐して、來し方を顧れば、つい半年餘り只愛の爲めだつた——盲目的な愛のために——別に人生の大切な意義を丸切り疎外してゐた。第一は、生活である。人間は必ず生活してゆかねばならず、それでこそ愛も生きてくるのだ。世の中には、奮闘するもののために開かれてゐる活路が決してないのではない。私もまだ翼の羽ばたきを忘れてはゐない、前よりは非常に衰へたとはいへ……

家と讀者は段々消え失せて、私は、怒濤のなかの漁夫、懸壕のなかの兵卒、自動車のなかの貴公子、開港地の相場師、深山密林のなかの豪傑、教壇に立つプロフェッサー、暮夜に走る運動員と深夜に働く盗人を思ひ浮べてゐる。子君——彼女は側にはゐない。彼女の元氣は皆つきまつた、たゞ阿隨のために悲しみ憤り、炊事のために氣が張りつめて、しかし不思議にもなぜ少しも瘦せ衰へてゐないか？

冷たくなつて來た。ストーヴの中の生殺しの石炭が終に燃え盡して、もう閉館時刻である。また吉兆胡同にかへつて、氷のやうな冷たい顔色を見なければならぬ。近ごろでは、たまたま温かい顔色を見ても、それが却つて私の苦痛を増すばかりである。想へば、或る晩、子君の眼に忽ち久しく見たことのないあどけない光が現はれ、笑ひながら私とまだ會所にゐたころの有様などを語つたが、時々又非常に恐怖の色が見えた。私は近ごろ彼女の冷淡に超越して、彼女の憂ひと疑を惹き起してゐることを知つてゐたから、努めて談笑して、彼女を少し慰めてやらうと思つたが、私の顔に笑ひが浮び、私の口に言葉が出て、それはすぐ空虚なものとなつた、その空虚はすぐ反響を起して、私の耳に返つて來て、一種堪へ難い惡どい冷笑を、私に與へるのであつた。

子君も感づいたらしい。彼女はそれ以来、平素の無感に似た落着を投げ棄て、努めて機嫌のいい顔をしてゐたが、時々憂いと疑ひの色を露はさずにはゐられなかつた。でも私に對しては、かへつて非常に柔和であつた。

私は彼女に打ち明けたのだが、まだ中々切り出せない。いはうと決心したときでも、彼女の子供らしい眼付を見ると、私は、暫時差控へて強ひて笑顔を見せるより外はなかつた。それはすぐに、私を冷やかに嘲り、同時に私のあの冷たい鎮靜を失はせるのだ。

彼女は、それからまた、以前のやうな復習と新しい試験をはじめ、私をして色々虚偽な温味のある答案を作らしめ、温味を彼女に示し、虚偽の草稿を私の心に記入せしめた。私の心は段々そんな答案で一杯になり、常に息苦しさを感じた。私は苦悶のなかにいつも思つた。眞實を語るには、極めて大きい勇氣が必要であり、若しもその勇氣がなくて虚偽を食ふならば、新しい活路を開き得ない人である、と考へた。さうでないばかりではなく、そんな人さへも今までなかつたのだ！

子君は怨めしげな色を現はした。朝、非常に冷たい朝、それは今まで見たことのない顔付であつ

た。だがそれも、私の眼から見ての怨めしさであつたのかも知れぬ。私はそのとき、彼女の練磨された思想と轄達無畏議論とは、結局一つの空虚であつて、その空虚に對してまだ一寸も自覺してゐないのを冷やかに憤り且つ笑つた。彼女はもう本などは見もしないから、人間生活の第一が生きることであり、この生きるための道をゆくには、手を携へて一緒に歩むか、自分一人で奮闘してゆくかしなければならぬ、若しも一人の裾を押へつけてゐることだけを知つてゐるのでは、勇士でさへ戦闘はできないで、一緒に滅びゆくより外はない、といふことを知つてゐる筈がない。

新しい希望は、たゞ私達が別れることにのみある、彼女は斷然捨てねばならぬ、と、私は感じた——しかし私も、突然彼女の死といふことに思ひ及ぶと、すぐに自責し、懺悔するのであつた。幸にして、朝も早く、時間も十分にあつたから、私の眞實を打ち明けてもよかつた。私達の新しい道の開拓は、實に此機會にあるのだ。

私は彼女と、無駄話をしながら、故らに私達の過去のことを引ずり出し、文藝に及んでは、外國文豪の作品——イブセンの「海の夫人」にまで觸れ、ノラの果斷を讚美し、又昨午會所の破家のなかで語つた話などをする。だが今ではもう空虚となつてしまつて、私の口から私の耳に傳はると時々、眼に見えない毀れた人形があつて、後から意地悪く、殘酷に口眞似するやうに疑はれた。

彼女はそれでも、うなづき答へつゝ、耳を傾けてゐたが、後では黙つてしまつた。私も、途切途切、私のいはうとすることをいつてしまつて、その餘韻さへも虚ろに消えてしまつた。「さうだわ」彼女はまた暫く沈黙して、いふのであつた。「しかし、……涓生さん、私、貴方が近ごろ非常に變られたやうに思ふわ。さうでせうか？ 貴方。貴方本當のことを私にいつて下さらない？」

それは私の頭に一撃を與へたやうな気がした。だがすぐ氣を取り鎮めて、私の意見と主張——新しい道の開拓、新しい生活の再造、さうすれば一緒に滅びゆくことを免れる——と話した。終りに、私は十分な決心をもつて、次の言葉を附け加へた——

「さうすればこそお前はもう心配することもなく、元氣よく眞直ぐに進むことができるのだ。お前は私に本當のことをいへといふが、さうだ、人間は虚偽であつてはならぬ、私は本當のことをいはう。何故なら、何故なら私はもうお前を愛さないのだ！ だがそれは、お前にとつては却つて非常に好いことなのだ。何故ならお前は、いつそ少しも心配なく仕事ができるからだ……」

私は同時に、大きな變化の到來を豫期しつゝも、たゞ沈黙してゐるより外はなかつた。彼女の

顔色は急に灰色に變り、死人のやうになつた。だがその瞬間にまた蘇り、眼のなかにあどけない閃きの光が發してきた。その眼の光が四方を射る様は、丁度赤坊が腹が減つて慈母を捜し求めるやうであつた、だがそれは空中にのみ捜し求めるのであつて、恐しさうに私の眼を避けた。

私はそれを見ることさへできなかつたが、幸に朝早かつたので、私は寒風を冒して、すぐさま通俗圖書館へ走つて往つた。

そこで「自由の友」を見ると、私の短篇が掲載してあつた。そのことは私を吃驚させ、稍々元氣づけたやうであつた。私は考へた、生きる道はまだ非常に多い、——だが、今のやうではやつぱりいけない。

私は、久しく遠ざかつてゐた知人を訪れるやうになつたが、それも一二回にすぎなかつた。彼等の家は勿論濶かかつたが、私は骨髓中には却つて寒さを感じた。夜は氷よりも冷たい寒い部屋にうづくまつてゐた。

氷のやうな針が私の魂を刺して、麻れ痛く私を永く苦しませた。生きる道はまだ多い、私もまだ翼の羽ばたきを忘れてはゐない、と思つた。——突然彼女の死に思ひ及ぶと、私はすぐ自責

し懺悔するのであつた。

通俗圖書館では、屢々一つの閃く光明、新しい生きる道が、眼の前に横はつてゐるのを、チラと見た。彼女は、勇敢に覺悟をして、潔くこの冷たい家を出ていつたが、しかも少しの怨めしい氣色もなかつた。私はすぐさま、浮雲のやうに軽くなり、大空に漂うたが、上には紺碧の天があり、下には深山大海、大廈高樓、戰場、自動車、開港地、邸宅、明るい市、暗い夜などがあつた。それのみではない、本當に私は、新生面が到來するやうな豫感がした。

非常に堪へ難い冬、わたしどもは結局この北京の冬をやつと過したのであつた。蜻蛉が悪戯な子供の手に入つたやうに、細い糸で縛られ、思ふがまゝに弄ばれ、虐待され、幸にして命を失ふことはなかつたが、その結果地上に横はり、たゞ遅いか早いかを争つてゐるやうなものであつた。

「自由の友」の編輯主任にはもう三回も手紙を出したが、今やつと返事が来て、その手紙のなかには、たゞ二枚の書籍券——二十錢と三十錢——が入つてゐるのみである。私は催促にさへ九錢の郵便切手を使つてゐるのに、一日中飯も食はないで、空しく待つてゐたにすぎなかつた。

しかし來るであらうことが、遂には來るやうに感じられた。

これは冬と春の界のことであるが、風はもう左程冷たなくなり、私もいつもよりは長く外をブラブラして、家に歸ると、あらかたもう暗くなつてゐた。こんな暗い晩には、私はいつも羨れながら歸り、家の門を見たばりでもうんざりして足が鈍るのであつた。しかし結局、自分の家に入つたが、燈はない、燐寸を捜して火をつけると、異様な寂寞と空虚がある！

丁度吃驚してゐる最中、大屋の奥さんが窓の外に來て、私を呼び出した。

「けふ子君さんのお父さまが來て、連れて行きましたよ」彼女は簡単に、さういつた。

これは豫期したことではなかつた、私は後頭をガンと殴られたやうに無言のまゝ立つてゐた。

「彼女は行きましたか？」暫くして、私はたゞこんな風に一言いつた。

「あの方は行かれましたわ」

「彼女、——彼女は何か言つてゐませんでしたかしら？」

「何ともおつしやりませんでした。たゞ貴方がお歸りになつたら、出て行きましたと言つて下さいと傳へるやうに被仰いました」

私は信じない、だが、家のなかは異様に寂寥で空虚であつた。私は遍く方々を見て、子君を捜したが、幾つかの破れた薄汚い家具ばかりで、皆判り切つてゐて、それが一人一物をも匿す力のないことを證明してゐる。私は思ひかへして、若しや彼女が残していつた書付でもないかと捜して見たが、それもなかつた、たゞ鹽と乾した唐辛子、麥粉、半分だけの白菜とが、一所に集められてをり、その傍に數十枚の銅貨があるのみであつた。それが私達二人の生活資料の全部で、現在彼女は、それを丁寧（ていねい）に私一人に残して行つてくれたが、いはず語らずのうちに、これだけの間の生活をわたしに維持せしめるのであつた。

私は周囲から押し出されるやうな気がして、中庭に走り出たが、私の周囲は眞黒であつた。主家の障子には燈火がハッキリと映じ、そこには子供の笑ひ聲さへ雜つてゐた。私の心も鎮まつて、重々しい壓迫のなかで、段々ぼんやりと逃げ出すべき道が見えて來た。深山、大澤、居留地、電燈の下での盛宴、眞黒な深夜、鋭い刃の一撃、音もない歩み……

いくらか氣輕になり、のんびりして、旅費のことを考へて、ふうつと息を吹き出した。寝てゐると、つぶつた眼の前に移りゆく豫想の行手が、夜中にならないうちに、もう絶えてし

まつた。闇のなかに、忽ちにして、一かさの食物が見えるやうであつたが、その後からは、子君の灰色な顔が浮び出て、子供のやうな眼を睜り、哀願するやうに私を見てゐた。私が氣をつけて見ると、何もなかつた。

だが私の心は、また沈んできた。私は何故數日耐へられないで、あんなに急に彼女に本當の話をしようとしたのであらうか？ 今になつては彼女も判つたらう、彼女がこれから持つものは、たゞその父親——子供達にとつては債權者——の烈日のやうな威嚴と側の人々が投げつける氷のやうな冷たい眼であるといふことが。この外は空虚である。空虚な重い荷物を背負つて威嚴と冷たい眼のなかをゆく所謂人生の行路、それは何と恐ろしいことではないか！ ましてその道のゆきつく果は、また、たゞ——墓標さへもない墓場である。

私は、眞實を子君に話してはならない、私達はかつて愛してゐたのだ、私は永に彼女に私の出鱈目を捧げねばならない。若しも眞實が尊ぶべきものであるならば、それは子君にとつては、或る重苦しい空虚であつてはならない。出鱈目は當然一つの空虚である。さはいへ結局は精々こんな重苦しいものでしかない。

眞實を子君にいつてきかせても、彼女は少しも臆することなく、斷乎として進むことは、私達

が同居前のときのやうにいつもさうであらうと、私が考へたのは、多分私の誤りであらう。彼女が當時勇敢で物に畏れなかつたのは、愛のためであつたのだ。

私は、虚偽の重荷を背負ふやうな勇氣がなくて、眞實の重荷を彼女に卸してやつたのだ。彼女が私を愛してからは、この重荷を負うて、威厳と冷たい眼のなかで、所謂人生の行路を進まうとしたのだ。

私は、彼女の死を思ふ……と、私は一つの卑怯者で、むろん、眞實であらうと、虚偽であらうと、強力な人達からは排斥されねばならぬものである。しかるに彼女は、始終なほ、私がやゝ暫くの間、生活を維持してゆくやうに希望してゐる。

私は吉兆胡同を離れる必要がある。こゝは異様に空虚で淋しい。たゞこゝを離れなければならぬのは、子君がまだ私の身のまはりにあるやうに思はれる、少くとも、城内にゐては、いつか不意に私を訪問してくるやうな氣がしてならない。會所に住んでゐたときのやうに。

さはいへ言傳も手紙も、すべて一として反響がない。私は已むを得ず、久しく訪ねない知合を訪問する外はない。彼は伯父の幼年時代の同窓で、經書で有名になつて拔擢された人で、北京に久しく住んでゐて、交際も廣い。

多分、著物が破れてゐるためであらう、門に入ると門番にいらされた。漸くのことゝで面會すると未だ覺えてはゐるが、非常に冷淡である。私達の過去を、彼はみんな知つてゐる。

「勿論、君はこゝにゐられない」私が他地方に職はないかと頼んだら、彼はそれを聽いて、冷やかにいつた。「だがどこにしたもんだらうな、兎に角、非常に難しい。——君、それ、どういふわけかね、君の友人、子君、君知つてゐるだらう、彼女は死んだよ」

私は吃驚して言葉がなかつた。  
「本當ですか？」私は、たうとう、口へ出して訊いた。

「ハハア。勿論本當だ。僕のうちの王升の家は、彼女の家と同じ村だ」  
「しかし、——どうして死んだのでせう？」

「そんなことは誰が知るもんか、要するに死んでしまつたのだ」

私はもはや、どんな風に暇乞してそこを出て自分の家に歸つたかを忘れてしまつた。彼は誰かを吐く人でないことを、私は知つてゐる。子君は決して二度と來はしない、昨年のやうなあんな風に。彼女は、威厳と冷たい眼のなかで、空虚な重荷を背負つて所謂人生の行路を進まうと思つてゐたのだらうが、それももうできなくなつた。彼女の運命は、私が彼女に與へた眞實——愛なき



人は死滅する——のうちに、既に決定したのだ。

勿論、私はこゝにはをられない、だが「どこへゆかうか？」

あたりは廣大な空虚の外に死の静寂がある。愛なき人々の眼の前に死せる暗黒をわたしは一々眺めて尙ほ一切の苦悶と絶望の藻掻の聲が聴えるやうである。

私はなほ、新しい、名もない、意外なものの到来を期待してゐたが、一日々々として死の静寂より外はない。

私は、以前に比べると、このごろは餘り外にも出ないで、たゞ廣大な空虚のなかに坐臥して、只管死の静寂が私の魂を蝕むに委せてゐる。死の静寂は、或るときは自ら戦慄し、自ら遠ざかるが、その斷續の界に、名もない、意外な、新しい期待を閃かすのであつた。

或る陰鬱な午前のこと、太陽はまだ雲間から出ないで、空氣さへもものうい日。細かい足音とフウ〜といふ鼻息が、ふと耳に聴えて、私の眼を睜らさせたが、見ると、家のなかは矢張空虚であつた。けれど、偶々、地面を見ると、瘦せ衰へて死にかけてた全身灰土色の小さい一匹の動物が、匍つてゐた。

私は仔細に見てゐると、私の心臓は一旦停止して、續いて直に跳ね上つた。  
それは阿隨だ。阿隨が歸つてきたのだ。

私が吉兆胡同を去つたのは、單に大家の人々とその女中の冷たい眼のためのみではなく、大部分はこの阿隨のためであつた。だが、「どこへゆかうか？」新しい活路は非常に多く、それが靡けながらに見えてすぐ眼の前にあるやうにも思はれるが、しかしそこへ進んでゆく第一歩の方法がまだ判らない。

数々の思量と比較を経たが、矢張身を容れる場所は會所だけであつた。同じやうにそれはこんなになつた破家、こんなになつた板のベッド、枯れかけた槐樹と藤ではあつたが、あのとき、私を希待させ、欣ばせ、愛させ、生きて行かしたものは、すべてなくなつてしまつた。たゞ一つの空虚のみが残つて、私が眞實をもつて換へてきた空虚のみが存在した。

新しい活路は、まだ非常に多い、私は必ず踏み越えなければならぬ、私はまだ生きてゐるのだから。けれど、どうして第一歩を踏み出すかが、私には判らない。或るときは、その活路が一本の灰色の長い蛇のやうに、ひとりでにウネ〜して私の方に走つて来て、私が待つてゐると近く

なつて来るやうにも見えるが、忽ち暗黒のなかに消えてゆくのである。

初春の夜はやつぱり永い。久しく枯坐してゐる中、午前中町で見た葬式が思ひ出された。前には紙人形と紙の馬で、後には歌のやうな泣聲。私は今やつと、彼等の聰明さが判つた、それは何と氣輕な簡單なことよ。

さはいへ子君の葬式もまた、私の眼の前に見え、それは獨りで空虚な重荷を背負つて灰色の長い道を進んでゆき、急に、周囲の威嚴と冷たい眼のなかに消え失せる。

私は眞に所謂、鬼魂といふものがあつて、眞に所謂地獄といふものがあればいいと思つた、さうすれば、すぐにでも、妖風の吹き荒ぶなかで、私も子君を尋ねてゆき、面と向つて、私の後悔と悲しみを語り、彼女の許しを求めようと思ふ、さうでなければ、地獄の毒蝮は、私を取り圍み、私の後悔と悲しみを猛烈に焼きつくすであらう。

私は、妖風と毒蝮のなかで、子君を抱擁し、彼女の許しを求めよう。さうすれば彼女を満足させるであらう……

だがそれは、新しい生くべき道よりは、より空虚である。現在にあるものとしては、たゞ初春の

夜のみで、それもやつぱりこんなに長い。私は生きてゐる。私は新しい生くべき道に向つて、その第一歩を踏み出さねばならぬ、たゞ子君のため、自分のために、私の後悔と悲しみを書いてゐるにすぎない。

私も矢張、歌のやうな泣聲で、子君を忘却のなかに葬つてゐるにすぎない。

私は忘れよう、私は自分のために、決して忘却をもつて子君を葬るやうなことを思ふまい。

私は、新しい生くべき道に、第一歩を踏み出さう、私は眞實を深く深く心の傷のなかに藏つて置き、黙々として前に進み、忘却と偽りとを私の道しるべにしよう。

(一九二五年十月二十一日)

兄 弟

公益局には、近ごろしなければならぬ用事もなく、數名の職員は、事務室で、例によつて、家庭のことを話し合つてゐる。奉益堂は水煙管を持つて、咳をしてゐるが、衆は、たゞ黙つてゐる。稍久しくして、彼は、紫色に膨れ上つた顔を持ち上げて、まだ息をフウ／＼させながら、いふのであつた……

「昨日も、彼等はまた喧嘩をはじめ、家のなかからずつと門口まで擲り合ひだ。俺がいくら叱つても駄目だ」彼は胡麻鹽鬚が疎らに生えてゐる 脣を顫はせてゐた。「老三がいふことには、公債で老五が損した金を分擔するわけにはゆかない。自分で賠償するがいい」

「ね、それもやつぱり金のためだよ」張沛君は憤慨して破れた安樂椅子から立ち上り、兩方の眼は深い腫のなかで優しく輝いてゐた。「一家の兄弟が何故そんなに細かく算盤を弾くのか僕は全

く解しかねる、どつちにしたつて同じぢやないか？」

「貴郎方兄弟のやうな者は何處にだつてありやしない」と、益堂がいつた。

「わたしどもはてんで勘定などしたことがない。何もかもお互様だ。わたしどもは錢金の二字を念頭に置かない。さうして置けば何事も起らない。どこかの家で財産争がある、わたしどもは結局自分達のことを話して、彼等に勘定するな、と勸めてやるのです。益翁もさうして御令息を御指導なさるがいい……」

「逆も……逆も」益堂は頭を振つていつた。

「そんなことはまあ出来ないね」汪月生はさういつて、恭しく沛君の眼を見ながら、「君達のやうな兄弟は實際減多にあるものぢやない。僕は今まで見たことがない。君達はつまり誰もが一點の私利私慾の念がないからだ。それや容易なことぢやない……」

「彼等は主家からずつと門口までなぐり合ひだ」と、益堂がいつた。

「君の弟さんは忙しいのかい？」と月生は訊いた。

「やつぱり一週十八時間の課業と、外に九十三題の作文があり、つまり忙し過ぎるんだね。しかしこの二三日は休んでゐる、熱が出て、多分一寸風邪……」

「それや氣をつけないといかんよ」月生は丁寧に行った。「今日の新聞ちや、今流行病が流行つて  
る……」

「何病だ？」沛君は吃驚して、慌しく訊いた。

「僕はよく知らないが、何とかいふ熱病だつたやうに記憶してゐる……」

沛君は、大股でサツサと新聞閱覽室に行った。

「本當に滅多にないよ」月生は、彼が飛んで出るのを見送つて、秦益堂に向つて、彼を賞讃して  
ゐた。「彼等二人は、丸で一人のやうだ、世間の兄弟が皆んなあんなであつたら、家のうちにいさ  
かひといふものは起りつこはないよ、僕には真似ができないよ……」

「公債で損した金を勘定に入れてはならんといふ……」益堂は紙附木を筒の中に挿込んで、恨め  
しげに言つた。

事務室の中の暫時の静寂が、間もなく沛君の足音と小使を呼ぶ聲に破られた。彼は、何か一大  
事件にぶつかつたものごとく、言葉は吃り、聲も震へてゐる。彼は小使にプデイス醫師に電話  
させ、すぐ同興公寓の張沛君のところに診察にゆくやうに話させた。

月生は彼が非常に慌ててゐることを知つた、何故なら、彼は西洋醫を信用してはゐるが、彼の收

入は多くはなく、平生儉約してゐるのに、今こゝで一番有名な一番貴い醫者を呼んでゐるからだ。

そこで彼は行つて見ると、顔は蒼ざめて、外に立つて小使の電話をかけるのを聴いてゐた。

「どうしたんです？」

「新聞では……猩……猩紅熱が流行つてゐるさうですが、午後私が局に出て來るとき、靖甫は顔  
を赤くしてゐました……。もう應診に出掛けたのか？……そんならどうぞ電話で捜して、すぐ來  
て下さいといつて呉れ、同興公寓、同興公寓だよ……」

彼は、小使が電話をかけてしまふのを聴いて、事務室に入り、帽子をとつた。汪月生もそれに  
つらされて慌て、跟い來た。

「局長が來られたら、僕休みました、家に病人が出來て醫者を呼びにいつたといつて下さい……」  
彼は、むやみに頭を振りながらいつた。

「君行つてもよいよ、局長は來ると極まつてやしないよ」と月生がいつた。

しかし彼はよく聴きもしないで、もう走つていつた。

彼は往來に出ると、いつものやうに車賃の安い高いなどは言つてゐられず、少し頑丈な、よく

走りさうな車夫を見ると、車賃を訊いて、すぐ車に飛び乗つて、「ウン、急ぎさへすりやいんだ！」  
といった。

下宿はいつものやうに、平穩で静かであつた。一人の小僧が、いつものやうに、門口に腰掛けて、胡弓を弾いてゐた。彼は弟のゐる寢室に入ると、心臓がひどく躍つた。弟の顔は一層赤くなり、息をはずましてゐたから、彼は手を伸ばして、弟の頭をなでて見ると、手の掌が火に炙つたやうに熱くなる。

「何の病氣かしら？ 大したことはないでせう？」靖甫はさういひながら眼には心配の色が漂うてゐる、彼自身尋常でないと知つてゐたことは明かである。

「大丈夫だ……風邪だらうよ」彼は、しどろもどろに返事をした。

彼は平生、専ら迷信を打ち破ることが、すきであつたのだが、この場合、靖甫の様子と言葉に聊か不吉を感じ、病人自身が何らかの豫感をもつてゐるやうに思はれた。この考へは、彼を一層不安にし、彼はすぐ出ていつて、そつと小僧を呼んで、病院に電話をかけさせ、プデイス醫師が見つかつたかどうかを訊ねさせた。

「さうです、さうです。まだ見つかりません」小僧は電話口でかういつた。

浦君はヂツとして腰掛けてをることもできないが、立つてゐても落ち著けなかつた。しかし彼はやきもきしてゐる間に、ふと或る一つの活路にブツつかつた、決して猩紅熱ではなからうが、何しろプデイス醫師は見つからない、……同じ下宿に住む白間山といふ人は、漢法醫ではあるが、ひよつとしたら病名を判断することができぬかも知れない、しかし彼は、今までに、白に對して何回も漢法醫攻撃の話をしたことがある。況してプデイス醫師を呼ぶ電話も、白はもう聽いてゐるかもしれない……

だがたうとう、彼は白間山に頼みにいつた。

白間山は、そんなことは少しも氣にせず、すぐ龜甲縁の黒水晶眼鏡をかけて、一緒に靖甫の部屋に來た。彼は脈を見、顔色を一回詳しく調べ、また著物を脱がして胸部を見、悠々と出ていつた。浦君はそれに跟いて、彼の部屋までいつた。

彼は浦君に椅子を勧めたが、口をきかない。

「間山先生、舍弟は一體……？」彼は待ち切れなくて訊いた。

「紅斑病です。御覽のやうにあの方には、もう斑點が現れてゐます」

「それでは、猩紅熱ではないのでせうか？」浦君は稍々嬉しさうであつた。

「彼等西洋醫は猩紅熱といふが、吾々漢法醫は紅斑病といふのです」

その言葉は、たゞちに彼の手足に寒氣を催さしめた。

「治りませうか？」彼は心配さうに問うた。

「治りますとも。それにはたゞ御宅の家運を見にやなりません」

彼はもうボンヤリして、自分でもどうして白間山に處方箋を書いて貰らつてよいかと當惑して、彼の部室を出た。しかし電話の側を通るときに、プデイス醫師の來ることに氣づいて、病院に問ひ合せたが、もう見つかつたが、忙しいから、往くのは遅くなるであらう、明日の朝になるかも知れない、との返事であつた。だが彼は、今日は非來て貰ひたいと願ふのであつた。

彼が部屋に入つて、燈をつけて見ると、靖甫は紅くなつてゐるやうであつた。確にまた一層紅い斑點が現れてをり、眼瞼が腫れてきてゐる。彼は腰掛けてはゐても、椅子は針の山のやうであつた。夜が漸く靜まり、彼の期待の中には、一臺々々の自動車の警笛の音がハッキリと聽え、或るときは、譯もなくプデイス醫師の自動車のやうに思はれ、飛び立つて迎へに出て見た。だが彼が門口までゆかないうちに、その自動車はもう通り過ぎた。ガツカリして引返し、中庭を通つたときには、皓々たる月が西の空に昇つて、隣家の一本の大槐樹はその影を地上にかけかけ、シンと

して彼の心を一層陰鬱にした。

突然烏が啼いた。それは彼が平生いつも聽いてゐるもので、その大槐樹の上には烏の巢が三つ四つあつた。それなのに、彼は今は却つて吃驚して殆んど立ち停つたが、慌しく靖甫の部室に飛び込んで見ると彼は眼を閉ぢてをり、顔一面腫れ上つてゐる。だが睡つてはをらない、多分足音を聽いたのであらう、急に眼を開けたが、二つの眼は燈の光のなかで異様に物凄いい閃きを發した。

「手紙ですか？」靖甫がさう問ふのであつた。

「いや、いや、僕だ」彼は驚いて、どぎまぎし、吃りながらいつた。「僕だ。僕はまた或る西洋醫を呼ばうと思つてゐるんだが、それがまだ見えないのだ……」

靖甫は返事もせず、眼をつぶつた。彼は窓際のテーブルの傍に腰掛けたが、すべては靜寂で、たゞ病人のせはしない呼吸の聲と、目醒時計のチクタクの音が聽えるのみである。突然遠方に自動車警笛が聽え、彼の心は急に緊張し、それが段々近づくのが聽え、段々近づいて多分門口で停車するだらうと思はれたが、すぐ通り過ぎたのが聽えた。さうしたことが何回も繰返されたが、そのたびに警笛にも様々の聲あることを知り得た、口笛を吹くやうなもの、鼓を打つやうなもの、屁を放るやうなもの、犬の啼くやうなもの、家鴨が啼くやうなもの、牛が啼くやうなもの、親鶏が吃驚

して啼くやうなもの、すゝり啼くやうなもの、などがある。彼は急に自己が怨めしくなつた、何故早くから注意して、あのプ醫師の自動車の音を知つてゐなかつたのであらうかと。

向側の下宿人はまだ歸つて來ない、いつものやうに芝居見物か、素見にでもいつてゐるのであらう。しかし夜はもう非常に更けてをり、自動車も段々少なくなつてきた。強い銀色の月の光が、障子を白く照らしてゐる。

彼が待ちあぐんでゐるうちに、心身の緊張が段々緩んできて、警笛にももう注意しなくなつた。だがとりとめのない考へがともすれば起つてくる、彼は、靖甫の病氣はきつと猖紅熱で、助からぬことが分つてゐるやうにも思はれた。さうしたら家の生計はどうして支へてゆかうか？ 自分だけ一人でやれるだらうか？ 小さい町に住んでゐても物價が貴くなつてゐる。…自分の三人の子供と彼の二人の子供とを養つてゆくのでさへも難しいが、その上學校に入れて勉強させることができるであらうか？ たゞ一人二人にだけ勉強させようか、それならば自分の康坊が一番利巧である、――併し世間はきつと、とやかく非難して 弟の子供を冷遇したといふであらう… 後をどうしてやらうか、棺桶を買ふ金も足りない、どうして郷里に運ばうか、暫く共同墓地に預けておく外はない…

忽ち遠くの方から足音が聴えて來るので、すぐ飛び立つて、部室を出て見たら、向側の下宿人であつた。

「先帝様は白帝城におはします…」

彼は、その低い嬉しさうな吟聲を聴くと、急に失望し、憤慨し、走つていつてその人を叱りつけてやりたくさへなつた。しかし彼は、それに續いて、また小僧が角燈提げてくるのを見つけたが、角燈の光は後から跟いて來る靴を照らし、上の方の微かな明りのなかには、一人の脊の高い、顔の白い、鬚の黒い人が見えた。それは正しくプデイスであつた。

彼は寶物でも目つけたやうに、飛んで行つて、プデイスを病人の部屋に案内した。二人はベッドの前に立つたが、彼はランプを提げて、照らしてゐた。

「先生、彼は熱が出てゐます…」と、沛君は喘ぎながらいつた。

「いつからですか？」プデイスは、ズボンのポケットに両手を入れ、病人の顔を見つめながら、緩りと訊ねた。

「一昨日。否、一昨…々日です」

プデイス醫師は物もいはずに、一應脈を見てから、また沛君にランプを高く上げさせて、病人

顔の上を照らさせ、一回よく見た。そしてまた蒲團を取り、著物を脱がして、見た。見てしまつてから、指を伸ばして、腹をなげた。

「Measles……」と、プデイスは、細い聲で獨語のやうにいつた。

「麻疹でせうか？」彼は嬉しさのあまり、その聲さへも顫へてゐた。

「麻疹」

「麻疹なら？……」

「麻疹」

「お前は、これまで麻疹が出たことはないかい？」

彼が元氣よく靖甫に訊いたばかりのときに、プデイス醫師はもうテーブルの方にいつてしまつたから、彼も跟いてゆかねばならなかつた。彼は、片方の足を椅子に上げて、テーブルの上にある便箋を一枚とつて、ポケットから非常に短い鉛筆をとり出して、テーブルの上で、サツサと難しい字を幾つも書いてゐたが、それが處方箋であつた。

「薬屋はもう閉まつてはゐますまいか？」浦君は處方箋を受けとつて、かうきいた。

「明日で構ひません。明日飲むのです」

「明日また見て頂けるでせうか？」

「もう見る必要はありません。酸っぱいもの、辛いもの、餘り鹽辛いものは、食べてはいけません。熱が下りましたら、尿を病院まで届けて下さい、検査しますから。綺麗な硝子瓶に入れて、その外に姓名を書いて……」

プ醫師はさういつて歩きながら、一枚の五圓札を受取つてポケットに入れてすぐ出て行つた。

彼は見送つて、醫師が自動車に乗り、走り出してから、引き返し、下宿屋の門に入ると、後の方にゴウ、ゴウといふ音が二度聴えた、そこではじめて、彼は、プデイスの自動車の音は、牛の啼くやうなものだといふことを知つた。しかし今になつて、それが判つても、何の役にも立たない、と彼は思つた。

部屋のなかは燈の光さへ爽かである。浦君はつくすべきことは、すべてつくしたやうに思へ、周囲はすべて平穩で、心も却つて洞になつた様子であつた。彼は金と處方箋を、跟いて來た小僧に渡して明日早く美亞藥房にいつて薬を買つて來るやうにいひつけた、何故なら、その藥房はプ醫師が指定し、その薬だけは信賴ができるといつたからである。

「東城の美亞藥房だよ！ 屹度そこに行つてくれ。解つた、美亞藥房だよ！」彼は出てゆく小僧



の後に跟いてさういふのであつた。

庭には月の光が一杯で、銀のやうに眞白である。「白帝城に在します」隣の人もう睡んだ、すべては静寂を極めてゐる。たゞテーブルの上の目醒時計ばかりが、愉快さうに規則正しくチクタクの音を立ててゐる。病人の呼吸が聽えるが、非常に調和的である。彼は腰掛けてゐたが、暫くして忽ち愉快な氣持がした。

「お前はこんなに大きくなつて、今まで痲疹が出たことがなかつたかえ？」と、彼は何かの奇蹟にでもあつたやうに、驚いてかう訊いた。

「……………」

「お前自身では覺えてをるまい。お母さんに聽けば判るだらう」

「……………」

「お母さんはこゝにはゐない。今まで痲疹が出たことはない。ハハハア！」

沛君がベッドのなかで目を醒ますと、もう朝日が障子から射し込んで、彼のボンヤリした眼を刺すのであつた。だが彼は、すぐはね起きることができず、何となく手足に力がなく、その上、

背中には氷のやうに冷たい汗が澤山出て、ベッドの側に顔中血だらけの子供が立つてゐるのを見て、自分は丁度彼女を打たうとするのであつた。

その光景は一瞬で忽ち消え失せたが、彼は一人で自分の部屋に寢てゐて、外に誰獨りゐはしなかつた。彼は襦袢のボタンを外して、胸から背中の冷汗を拭きとり、好い著物を着て、靖甫の部屋にいつたときには「白帝城に在します」隣の人が庭で口を嗽いでゐて、もう時刻も餘り早くはないことが判つた。

靖甫も眼を醒ましてゐて、大きな眼をして、ベッドに寢てゐた。

「今日はどうか？」彼はすぐさう訊いた。

「大分好ささうです」

「薬はまだ來ないか？」

「來ません」

彼はテーブルの側に腰を下して、ベッドに向き合つた。靖甫の顔を見ても、もう昨日のやうな赤さはない。併し自分の頭の方がまだボンヤリしてゐて、夢の片々さへもチラ／＼と浮んで來る。——靖甫がかうして寢てゐると、屍のやうに見える。彼は慌しく棺に納れ、獨りで棺を背負

つて、表門から主家へ入るが、その場所はとも自分の家のやうで、澤山な見知りの人々が、方々から讚めてゐるのが見える……

——彼は康坊と二人の姪を學校に入れるやうにした。が、後の二人の子供が泣いて、跟いて來ようとする。彼はもうその泣き聲が五月蠅くて仕方がなかつたが、それと同時に、自分が最高の權威と極大の力をもつてゐるのだといふ氣がした。彼は自分の掌が、平生よりも三四倍大きく、鑄鐵のやうに感じられたが、その掌が荷生の横ツ面をひつばたいた。

彼は、こんな夢に襲はれて、怖くなり、起ち上つて、部屋から驅け出さうとしたが、體が動かなかつた。またこんな夢を壓しつけよう、忘れようとしても、水のなかに攪き雜ぜられた鵝鳥の毛のやうに、何回も何回もグル／＼廻り、浮き上らずにはゐないのだ。

——荷生は顔中血だらけにして、哭きながら入つて來る。彼は佛壇に飛び上つた……。その子供の後には一隊の見知りの人や見知らぬ人が跟いてゐる、彼は、その人達が自分を攻撃に來たのだといふことが判つた。

——「僕は決して良心までも失つてはゐないのだ。諸君は子供の誑話に騙されてはいかん」  
彼は、自分でかういつてゐるのが聴えた。

——荷生は彼の側に來たので、彼は又掌を振り上げた……

彼がフト眼を醒ますと、非常に疲れてゐて、背中がまた少し冷たく感じた。靖甫は、眞向うに靜かに横はつてをり、その呼吸は早いけれど、非常に規則正しい。テーブルの上の目醒時計は一層大きくチクタクのと音を立ててゐる。

彼が振り返つて、テーブルに對ふと、上に覆はれた塵が目立つてゐる。更に障子を見ると、柱唇が掛つてゐて、眞黒な隸書で廿七と二字書いてある。

小僧が藥を持つて來た、彼はその外に一包の書籍を抱へてゐた。

「何？」靖甫は眼を大きくして訊くのであつた。

「藥だ」彼も恍惚のなから醒めて、かう答へた。

「否、あの包は？」

「あれは何でもない、藥をお上りよ」彼は靖甫に藥を飲ませてから、その包みの書籍を取つて見た。「索士が寄越したのだ、屹度お前が彼から借りた本だらう、あの Sesame and Lilies」

靖甫は手を伸して、その書籍を取らうとした。書籍をとつて、背中にある金文字を見ると、枕許に置いて黙つて眼を閉じた。暫くたつて、嬉しさうに低い聲でいふのであつた……

「好くなつたら、少し譯して文化書店に送つて、幾らか金にしませうよ、先方で要るかしら？」

この日、浦君は、平生より非常に遅く、公益局に行つた、それは殆んど晝過ぎに近かつた。事務室は、もう、奉益堂の水煙管の煙で一杯だつた。汪月生は遠方から見て、迎へに出た。

「やあ、出て来たね。弟さんは好くなつたア、大したことはないと思ふよ。流行病は年々あるんだし、何でもないことだ。僕と益君とが丁度今、氣にしてゐたところだ、皆ないつてよ、どうしてまだ来ないのかしらつて。まあ出て来られて、好かつた、見給へ、君の顔色の好い事。さうだ、昨日とは丸で違つてゐるよ」

浦君の方でも、此事務室と同僚が皆な昨日とは違つてゐて、生新しいやうに見えた。萬事は彼の今まで見慣れてゐたものではあつたが、折れた著物掛、口の缺けた痰壺、亂雑に塵にまみれた書類、脚の折れた破れ椅子、椅子に腰掛け永煙管を持ち、咳しながら頭を振り／＼慨嘆する奉益堂……

「彼等は又主家から大門まで殴り合ひだ……」

舞ふよ……」

「老三はいふんだ、老五が公債で損した金は算入できないつて。さうとも……さうとも……」

堂は、腰を屈めて咳き込んだ。

「全く、『人心は同じからず』だ……」月生はさういひながら、浦君の方に向つて「ぢや、弟さんは何ともないのか？」

「何ともないつて？ 醫者は麻疹だといつたよ」

「麻疹？ さうだ、この頃は、他所の子供が皆な麻疹に罹つてゐる。僕と同じ家に住んでゐる三人の子供も、皆な麻疹だ。それは大したことはないんだ。だが君、君が昨日の周章て方には、全く他の人を感動させたよ。そりや、兄弟仲の睦じいのはいいものだよ」

「昨日局長は來られたかい？」

「やつぱり『杳として黄鶴の如し』さ、君、帳簿に『出勤』と書いておけよ」

「自分で賠償するがいいといふのだ」益堂は獨語のやうにいつてゐる。「その公債は本當に魔物だよ。俺はそのからくりが全く判らない。君だつて手を出して見ろ、すぐにひつかゝるから。昨日も、晩になると又始まつたんだ。老三の子供が二人餘計に學校に行つてゐるのだが、老五は公

平でないと言つて、それをぶつ／＼言ひ出すのだ。俺は本當にくさ／＼する……」

「それは愈々面倒だね！」月生は失望したやうにいつた。「それだから、君達兄弟を見る。沛君、僕は本當に頭が下るよ。さうだ、それは面と向つての御世辭をいふんぢやないんだ」

沛君は口もきかない、小使が書類を持つて来るのを見て、立つて行つてそれを受けとつた。月生も跟いて行つて、手にとつて読み上げる……

「公民郝上善等の届出に依れば、東郊に行路病者男の屍體あり、公益局に於て速に納棺埋葬し、衛生に資し、公益を重ぜられたし」と。

僕がやるから、君は少し早く歸り給へ。君は屹度弟さんのことを心配してゐるんだ。君達は本當に『鶴鶴原に在り』といふやうな睦じさだ……」

「否！」彼は手を放さず、「僕がやる」といつた。

月生もその上引つたくつてまでしようとはしなかつた。沛君は十分安心したやうに、落著拂つて、自分のテーブルの前にゆき、屈書に眼を通してながら、手を伸ばして、縁青剝げのした硯の蓋を開けた。

(一九二五年十一月三日)

### 離 婚

「おゝ木叔！ 新年おめでたう、相變りませず」

「やあ元氣だね、八三！ おめでたう、おめでたう」

「あい、あい、おめでたう！ 愛姑も御一緒だね……」

「おゝ、木老人！……」

莊木三と彼の娘——愛姑——は今、木蓮橋の袂から巡航船に乗込むと、船の中ではいろ／＼の聲が、一時にがや／＼と叫び出し、其中の幾人は拳を胸に合せて會釋し、同時に身を片寄せて四人前の座席を空けた。莊木三は挨拶しながら長煙管を船邊に寄せ掛けて坐し、愛姑は彼の左側に坐し、鈎のやうに尖つた纏足の靴を向側の八三の方に向けて八字形に並べた。

「木老人、縣へお出でになるのですか」

と角張つた顔の男は訊いた。

「縣へ行くのぢやない」

と言つた木公公の顔は些か遺瀨ないやうに見えたが、其紫がかつた皺に多くは原因してゐるので、大した變化を見出すことが出来なかつた。

「實は龐莊へ一走りして来るんだ」

船内の人はしばし鳴りを静めて彼等を見てゐる。

「やつぱり愛姑のことですか」

としばらくして八三が訊いた。

「やつぱり此兒のことだね——俺や逆もやり切れない。もう丸三年も騒いでゐるんだからね。喧嘩をしたり、仲直りをしたり、結局どうしても納まりがつかない」

「今度も矢張り慰老爺家へおいでになるのですか」

「やつぱりあすこへ行くのだ。彼が和議を申込んで来たことは一度や二度ではないが、わたしは皆つツばねてやつた。これは何でもないが、今度はあちらに新年宴會があつて親戚が皆集り、縣の七大人もおいでになるのだ——」

「七大人も？」

八三は眼を大きく見張つた。

「あのお方が口をきくのですか——それや——本當にね、去年わたしどもが彼等の籠を叩きこしてやつたから、結局もう腹癒せをすましたのだ。況して愛姑が向うへ歸ることは、本當にね、何の面白味もありませんよ……」

彼は眼を下へ向けた。

「わたしや向うへ歸りたいなんて、些つとも思つてやしませんよ。八三哥！」

と愛姑はブリ／＼して頭を上げた。

「わたしや腹が立つ。ねえ貴郎、あの小畜生がチビ寡婦と出来合つてゐるから、わたしが要らないのです。事情は解り切つてる事です。大畜生は倅の肩を持つからわたしが要らないのです。これも解り切つたことです。七大人が何です。知事様と兄弟分になつてる人が、人情の解らぬ筈はありません。彼は慰老爺のやうに只「別れる、別れる」とばかりいつてゐられますまい。わたしは此幾年の憂き難を残らず話して、どちらが間違つてゐるか、七大人に訊いてみる積りです」

八三は説服されて黙つて仕舞つた。

船首に當る水の音がサラ／＼と聞えるだけで船の中はいとも静かだ。莊木三は手を伸ばして煙管を探り出し煙草を詰めた。

斜かひの方に、八三と並んで坐してゐる肥つた男が、腹巻の中から一つの燧石を出してホクチに火をつけ、彼の雁首の上に押付けてやつた。

「やゝ、濟まなかつた」

と木三はうなづいた。

「お目にかゝるのが初めてですが、木叔のお名前はとうから存じてをりました」

肥えた男はうやくしく

「まつたく此沿海三六十八村の内、誰だつて知らないものはありませんよ。施家の倅が寡婦と密著してゐることは、わたしもとうから聽いてをります。去年木叔が六番目息子を連れて行つて、彼の籠をぶち壊したことは、誰でも當前だと思つてゐます——貴方のやうなお方は、歴々の中に

大手を振つて行かれるのだから、彼等に恐れてなるものか……」

「をぢさんは好くお解りになる」

と愛姑ほ氣持よげに言つた。

「わたしは未だ存じてをりませんが、貴郎は何と被仰るんですか」

「わたしは汪得貴です」

肥えた男はせはしなく言つた。

「わたしを抛り出さうとしたつて駄目です。七大人でも八大人でも構ふことはない。わたしは何處までも頑張つて、彼等の家が潰れるまで喧嘩してやる。慰老爺が四度もわたしに頼みに來た

位ぢやありませんか。家のお父さんでも手切の話が始まると頭がぼーとして眼が眩んで來るんだからね……」

「馬鹿言へ」

と木三は小聲で言つた。

「去年の暮に施家では、支那料理を一テーブル慰老爺家へ送つたさうぢやないかね……」

角張つた顔の男は言つた。

「それは差支へないことだ」

汪得貴は言つた。

「支那料理で人の出來心が堰き止められようか。若し果して支那料理が人の出來心を堰き止めれ

ば西洋料理をやつたらどんなことになる。彼等は本を讀み道理を知つてゐるから、人の家の爲めには公平の話をする。例令ば一人が大勢の者から迫害された時、彼等は誰にも解る道理を説いてやるのは、酒の馳走のあるなしとは關係しない。去年の暮、うちの村の榮老爺が北京から歸つて来たが彼は檜舞臺を踏んだ丈けあつて、俺達のやうな田舎者とはチト質が違ふ。彼の話では向うで第一流の人物は何と言つても光太太だ。又硬い……」

「汪家滙頭行の人は上つて下さい」

船頭は大聲上げて叫び、船はもう停まつてゐた。

「下りるよ、下りるよ」

肥えた男は早速煙管を取つて、中艙から跳り出し、前進する船と離れて岸に上つた。

「失敬、失敬」

彼は船の中の人に向つて頭を動かした。

船は新しき静寂の中に前進を續け、水の聲がサラ／＼と聽えるやうになつた。八三は居睡りを始め、だん／＼鉤形の靴の方に向つて口を開けた。前艙には二人の老女が小聲でお稱名をとなへ珠數をつまぐつてゐたが、愛姑の方を見て、二人は互に眼を見合せ、口を尖らせ、頷き合つた。

愛姑は篷の頂に眼を据ゑてゐた。これから何とか騒ぎを起して、彼等の家を潰してやり、あの「老畜生」や「小畜生」を路頭に迷はしてやりたい、と大方こんな考を起してゐたに違ひない。慰老爺などは彼女の眼中にはなかつた。二度ばかり逢つたが、イガ栗頭の矮小助で、あゝいふ人間は此村にも随分多く、只顔色が彼よりもいくらか黒いだけのことだ。

莊木三は煙草を吸ひつゞけてゐる。火が雁首の底に迫り、脂が溶けてぢい／＼鳴つてゐるが未だ吸つてゐる。汪家滙頭の次は龐莊だ。あの村の入口の魁星閣は此處からもう見えてゐる。彼は幾度もあすこへ行つて遂に慰老爺の仲裁になつたが、それもいふに足らぬことだ。娘が泣いて歸つて来たので、縁家も婿も憎らしく思はれ、其後どれほどひどい目に遭はせてやつたらうか。と思ふと過ぎ去つたことが眼の前に現はれ、縁家懲罰の一節には、彼はいつも涼しく微笑まれるのであるが、今度は忽ち、でつぷり肥えた七大、人いふ者が胸に悶へて来て、なぜかしらん、彼の頭の中の陣形が整へにくくなつた。

船は静寂續きの中に前進を續けた。念佛の聲だけは大きくなつて来たが、其他は木叔と愛姑におつき合ひして沈まり返つた。

「木叔、お前未だ上らないのか。龐莊に著いたよ」

木三等は船頭の聲に覺醒された時、鼻先に魁星閣があつた。

彼は岸へ跳び上り愛姑は跟いて来た。魁星閣の下を過ぎ、南に向つて三十軒ほど行つて一曲りするると、すぐに慰老爺の屋敷が見えて、門前の小河に黒い篷船が四艘並んでゐる。

彼等は黒塗の表門を潛つて門番に迎へられて進んだ。表門の後ろにはテーブルを二臺据ゑ、船頭と小作人等が集つてゐた。愛姑は彼等を見る氣もないが、一寸目を止めると、そのあたりには「老畜生」も「小畜生」も見えなかつた。

作男が年糕湯を持つて来た時、愛姑は我れ知らず居づらくなつて、自分でもわけがわからなくなつた。

「知事様と兄弟分になつてゐる人が人情のわからぬことがあるもんか。本を讀んで道理の解つてゐる者は公平の話をする。わたしは七大人にこま／＼話してお嫁に行つた十五の歳から話を始め……」

年糕湯を食べて仕舞ふと、彼女は機が近づいて来たと思つた。果して一刻の後には、作男の導きで父と一緒に大廳を通り過ぎ、一つ曲つて客廳の門檻を跨いだ。

客廳の中にはいろんなものがあつたが、彼女の眼には止まらず、只多くの客が集つて、紅い緞

子や青い緞子の禮服がキラめき、其真中に一目見ても目につく人が、定めて七大人だらう。これも亦イガ栗頭であつたが、慰老爺よりもすつと立派だ。大きな丸顔に二つの細長い眼と、漆のやうに濃やかな鬚が目につき、頭の天邊は禿げてゐるが、顔も頭も赤く潤ひ油のやうにピカ／＼してゐる。愛姑は不審を起したが、すぐに自分で釋明した。あれは豚の脂でもなすりつけてゐるのだらうと。

「これがその『屁塞』といふもので、古人が入棺の時、尻の穴を塞いだものです」

七大人は丁度爛石のやうなものを手に持つて説明してゐた。自分の鼻の側へあてて二擦りほど擦つてみて

「惜しいことにこれは『新坑』だ、けれど買つて置くがいい。漢よりあとのことはない。見給へ、この一點の『水銀浸』を……」

「水銀浸」のまはりに早速頭が集つた。一人は勿論慰老爺であつたが、未だ幾人も少老爺がゐた。彼等は尻つびり蟲のやうに威壓されてゐたから、今まで愛姑の眼には入らなかつたのだ。

彼女は後の話は解らなかつたが、聴きたくもなし、又「水銀浸」とかいふものについて研究したくもなかつた。そこで暇塞げにあたりを見廻すと、遙か後ろに、入口の側壁に寄添うて立つてゐ



る「老畜生」と「小畜生」が目にと止まつた。ちらりと見ただけではあるが、半年前、偶然逢つた前よりも慥かに變れてゐた。

まもなく衆は「水銀浸」のまはりから離れた。慰老爺は「屁塞」を受取り、席に著いて、指先でそれを擦りながら顔を莊木三に向けた。

「お前達は二人キリか」

「はい」

「もう一人のお前の倅は來ないのか」

「あれは暇が御座いません」

「本來新年匆々、こんなことで御足勞を願ふにも當らないが、何しろ、あの事件は……乃公は思ふ、お前達はあんまり漆濃い。もう二年越してはないか。乃公は思ふ、冤讐といふものは解くが、結んではいかん。愛姑は夫に嫌はれ、舅姑と合はない……これはやつぱり前に話した通り、あゝいふ工合にして別れて仕舞つた方がいい。乃公にはそんなことをいふ資格がないから、お前達に話がよく通じないが、七大人はお前達も知つての通り、最も公平なお方だ。現在七大人の御意見を伺ふと、わたしと全く同じことだ。七大人の御意見では、これは雙方が災難と諦めれば

いい。施家はもう十圓増して九十圓！」

「……………」

「九十圓！ お前達が訴訟を起して皇帝陛下の前へ持出しても、これほど解りのいい話はあるまゝ。此話はわれ々の七大人にしか言へないことである」

七大人は細い眼を睜つて莊木三を眺め、輕くうなづいてゐた。

愛姑は何となく心細くなつて來た。ふだん沿海の住民から一もく置かれる自分の父が、なぜか

しらん、此處へ來ると一言も言へない。

彼女はこんなにしらないでもよからうと思つた。

彼女は七大人の話を聞いたあとでよく解らぬ處もあつたが、何となく親しみ易いところがあつて前に想像したやうな決して懼い人ではない。

七大人は本を讀んで道理をよく知つてゐるお方だから、物事が好く解る。

彼女は勇氣が出て來た。

わたしどのやうな田舎者とは違ふ。わたしは訴へどころのない無實の罪を受けてゐるから、七大人にお頼みするのだ。わたしはお嫁に行つてから頭を下げ通して何一つ禮儀に背いたことは

ない。彼等はわたしと反対に、一人々々が鐘馗の腹立ち面だ。あの年、鮎が雄鶏を咬み殺したの  
は、わたしが鶏欄を締め忘れたのではない。あの瘡搔き狗が糠飯を偷みに来て、鶏欄の門を開け  
放しにして置いたんだ。それをあの小畜生め(彼女の夫)、青も赤も白も黒も一緒にしやがつて、  
すぐ手を上げやがつた……

七大人はちらりと彼女を見た。

「これには少しわけが御座います。決してこれは七大人のお目こぼしになることではないと思ひ  
ます。學問のあるお方は何事も御承知です。夫はつまりあの淫らな女に迷はされてゐるので、わ  
たしを追ひ出さうと思つてゐるのです。わたしはチャンと振袖を着て花轎に乗つてお嫁に行つた  
んです。そんな他愛もないことで済ませうか。わたしはどうあつても、あの人達の顔色の變る  
のを見てやる積りです。訴訟を起しても構ひません。縣でお取上げがなければ府へ出ます……」

「そんなことは七大人は皆御存じだよ」

慰老爺は顔を上げた。

「愛姑、お前が頑張つて何がいいことがあるもんか。お前がいつまでもそんな風だと、ねえ御覽  
な、お前のお父さんはいくらか解るが、お前とお前の兄弟が解らないのだ。表沙汰にしてお役所

に出で御覽、お役所ではかうやつて七大人と話をするやうな工合にはゆかないよ。其時は表向に  
判(公事公辨)といふことになるからね。それこそ……つまり……」

「さうなりや、わたしだつて命を投げ出して、家が潰れてちりちりになつても」

「それは命を投げ出すやうなことぢやない」

七大人はおだやかに言つた。

「若い時には、人は皆、氣を優しく持たなければいかん。氣が優しくければお金が出来(和氣生  
財)、ねえさうぢやないか。わたしが十圓増したといふものは、つまりこれは今となつてみると、  
天外の道理なんだ。舅姑が出て行けといへば、出て行くのが當前だ。府縣はいふまでもなく、上  
海でも北京でも、又外國でもみなさういふものだ。諺だと思ふなら、あの人はたつた今、北京の  
洋學堂から歸つて来た人だから、訊いてみなさい」

さういつて尖り顎の一人の少爺に顔を向け

「ね、さうぢやないか」

「いかにも被仰る通りで」

尖り顎の少爺はあはたしく身を起して眞直ぐになり、恭々しく言つた。

愛姑は自分が全くひとりぼつちになつたことを感じた。お父さんは黙つてゐるし、兄弟は跟いて来ないし、慰老爺は初めつから向うの味方だし、七大人も亦頼みにならないし、矢張り顎の少爺も小聲になつてへいこらしてゐるところを見ると、一つの屁つびり蟲のやうなもので、彼も亦お太鼓(順風鑼)を叩いてゐる。

併し彼女はつかみどころのない中にも最後の奮闘を決心した。

「なぜ七大人でさへも……」

彼女の眼から驚きと疑いと失望の光りを發した。

「さうです……わたしは解りました。わたしどものやうな無學の者には、どうしようもありません。お父さんだつて、人情も何も解らぬ老惚れだから怨めしい。これは皆「老畜生」や「小畜生」の計畫です。丸でお葬式の報せでもするやうに、こそく穴潜りして、人と馴れ合つてゐるのです」

「七大人、御覽下さい」

今まで黙つて彼女の後ろに突立つてゐた「小畜生」は忽ち聲を上げた。

「彼女は大人の前へ出てこんな風で御座いますから、家にをりました時分は、それやもう大變

な騒ぎで、飼犬も飼猫も泣きどほしです(六畜不安)、わたしの親爺に向つては「老畜生」と叫び、わたしに向つては、やれ「小畜生」だの、やれ「私生兒」だのと、口を動かすたびに悪口雑言を吐きます」

愛姑はカツとして顔を「小畜生」に振向け

「お母さんが千萬人と繋り合つて、生んだ子は私生兒ぢやなからうか」

と大きな聲を出したが、すぐに又七大人に向つて

「わたしは未だ皆さんの前で言ひたいことがあります。彼は人前でそんな立派な口がきかせようか。彼は口を開くたびに妾腹(賤胎)とか親殺しとかいろ／＼の悪體を吐くのです。あの淫婦と出来合つてから、さういふ悪體がますます烈しく、わたしども先祖の名まで引きずり出されるのです。七大人、どちらがいいか、比べて見て下さい。これは……」

彼女は一つ胴顛ひしてあはて、口を嚙んだ。それは七大人が忽ち二つの眼玉をぐるりと上へ廻し、丸い顔を仰向けにして、細長い鬚に圍まれた口の中から、一種引きのある高大声を發したからだ。

「おー出て參れ」

彼女は心臓の鼓動が一時停まるやうに感じ、續いて胸が高鳴りした。もう山が見えて仕舞つて場面が變つて來た。水の中に足を踏み込んだやうに失策つたと思つた。速刻進んで來たのは藍色の袍に黒い背心を著た男、七大人の前へ來ると、手を垂れ腰を伸ばして棒をのんだやうに突立つた。客廳の中は鳴りを静めてゐる。七大人は口を動かしたが、何を言つてゐるのか、誰にも聴き取れない。併しその男にはよく聴き取れたものと見え、命令の威力は彼の骨髓に沁み通り、ぶるツと一つ武者振ひして身體を二引ほど引いて

「はッ」

と答へて、更に幾足か後退りして身を翻して出て行つた。

愛姑は何か意外の事が始まるのぢやないかと思つた。それは逆も想像の出來ないことで豫防のしやうもない。彼女は此時やつと七大人の威嚴が解つた。前の行動は皆自分の思ひ違ひで、あんまり我儘過ぎていけぞんざいであつた。彼女は非常に後悔して、われ知らず言つて仕舞つた。

「わたしは初めつから、承知してゐたんです。七大人のお吩咐……」

客廳の中は鳴りを静めてゐる。彼女の聲は絲のやうに細かつたが、慰老爺の耳には神鳴の音のやうに好く聞えた。彼は跳び出して來た。

「さうだ。七大人は眞實公平だ。愛姑も眞實理解した」

彼は頻りに讃め立てながら莊木三に向つて

「とつさん、お前は無論言ひ分はないだらう、彼女が自分で承知した以上は。紅綠帖も定めて持つて來てゐるだらうな、乃公が知らせて置いたから。ウム、そんならみんな此處へ出しなさい……」

愛姑は父が手を伸ばして腹巻の中をさぐつてゐるのを見た。

棒キレのやうなあの男が入つて來て、小龜のやうな恰好の黒塗の平たいものを七大人に渡した。

愛姑は事情の改變を恐れ、慌しく父を見ると、彼はもう茶卓の上で藍木棉の包を開き、中から

銀貨を出した。

七大人は小龜の頭を脱ぎ取り、其胴體から何か粉のやうなものを掌の上に振り出し、棒キレ

男にその品物を返した。七大人はすぐに片手の指先を掌に醗してこれを鼻の孔になすりつける

と、鼻の下が少し焦茶色に染まつた。彼は鼻を齧めて嚏が出たいやうな顔した。

莊木三は其時銀貨を數へてゐた。慰老爺は未だ勘定しない一重ねのうちから、幾らか取出して

「老畜生」に返してやつた。又雙方が紅綠帖(婚書)を交換する場所を定めた。さうして口の中で言つた。

「お前達は丸く納まるがいい。老木、お前は間違ひないやうに勘定するがいい。これは冗談事ぢやないからね、金銭の事だから……」

「ハツクシヨイ」

と一聲ひびいた。愛姑は七大人が噓したのだらう、と思はずそこへ眼を向けると、七大人は猶ほ鼻を皺め口を開き、片手に一物を撮んでゐた。それは「古人が大殮の時、尻の穴を塞ぐもの」で、小鼻の邊をこすつてゐた。

しばらくして莊木三は銀貨を片附けた。

雙方は席に著いて、それ／＼の紅緑帖を取戻した。

みんなの腰骨はのび／＼した。先づ顔色がやはらいだ。客廳の中は頓に一團の和氣を見た。

「よろしい！ 事は丸く納まつた」

慰老爺は雙方が辭去してゆく心持を見て、一息吐いた。

「そんなら、ウム、他にもう何にも用はない。めでたい。めでたい。結局一つのこんがかりを解いたわけだ。お前達はこれからすぐにゆくといふのか。そんなに急ぐには當らないよ。わたしの家の年始の酒を飲んで行くがいい。これは又と無いことだよ」

「わたしどもは失禮します。明年までお預けにして置ませう」

と愛姑は言つた。

「はい、ありがたう。慰老爺。わたしどもは未だ少し用事も御座いますから……」

莊木三も「老畜生」も「小畜生」も皆同じやうなことを言ひながら退出した。

「え？ どうしてね？ 少しも飲んで行かないの？」

慰老爺は一番後に歩いてゐる愛姑に注目しながら言つた。

「はい、頂戴致しません、有難う御座います。慰老爺」

(一九二五年十一月六日)

## 魯迅年譜

周樹人氏魯迅と號す。一八八一年浙江省紹興府に生る。祖父は翰林院大學士、父は讀書人、家には四五十畝の水田あり、母は魯氏、農家の出なるも相當の學問を自修せり。

一八九三年、祖父は事を以て牢獄に投ぜられ家産傾く。氏は時に十三歳、一旦親戚に寄寓せしも、偶ま父の重病に遭ひ、看護のため家に歸り孝養を盡せしがその甲斐なく、一八九六年に至つて父は遂に病没せり。翌年母は氏の希望を容れ、貧困中八圓の旅費を工面して南京に遣はす。氏は同所に於て知己を作り、苦心慘澹の末、洋學派の礦山學堂に入り、數年の後、優等にて卒業す。

一九〇二年、氏二十二歳の時、省選抜の留學生となり、日本に留學、東京弘文學院に入り、二年間日本語と普通學を修む。

一九〇五年(二十五歳)、仙臺醫學專門學校に入り、翌六年退學、支那人侮辱の映畫を見て發奮し、醫術の希望を文學に更へ、雜誌「新生」の發刊を企てしも成らず、のち、弟周作人氏と共に外國文學の翻譯を試み、「域外小説集」を著し第二集に至つて止む。此時未だ白話體起らず純粹の古文を用ゆ。

一九〇九年(二十九歳)、家事の都合上歸國し、杭州師範學校にて化學と生理學を教授し一年にして止む。一九一〇年(三十歳)、紹興中學の教務長となり、半年にして止む。

一九一一年(三十一歳)、武漢革命起るや南京に入り、同郷の先輩蔡元培氏の下に教育部の役員となる。  
 一九一二年(三十二歳)、第一革命成るや南京政府は北京に移轉し氏も亦教育部と共に移り、引續き十五年間(四十六歳まで)同所に於て、教育部僉事、京師圖書館長に歴任し、兼ねて北京大學、師範大學、女子師範大學等に教鞭を執る。

一九一七年(三十七歳)、二年前に創刊せる雑誌「新青年」は胡適之氏が米國より寄せたる「文學改良芻議」を掲げ、續いて陳獨秀氏の「文學改革論」あり、古文を捨て白話文を主張し、文藝改革の劃期時代に入り、名論卓説は續々發表されたるも、未だ勝れたる文藝作品出でず。

一九一八年(三十八歳)、四月雑誌「新青年」は氏の處女作「狂人日記」を掲載し、初めて思想、文章共に舊套を脱したる新文學の典型を示したるにぞ、已に白話文學に熱意を持てる中國青年等は異常の亢奮を以て之れを迎ふ。續いて「孔乙己」「藥」「明日」「些細な事件」「頭髮の故事」「風波」「故郷」等一作出づる毎に、狂熱的感動を全中國に與へたり。

一九二二年、世界的不朽の傑作「阿Q正傳」出で、「北京新報附録」に連載さる。氏は時に四十一歳。

一九二二年、北京新報附録より烏合叢書第一卷「呐喊」出づ。これは「狂人日記」以下十四篇を收む。その中に「阿Q正傳」もあり。

一九二三年、同書局より「中國小説史略」出づ。これは氏の北京大學に於ける講義を纏めたるもの。

一九二五年、十一月「離婚」出づ。此頃より氏は殆ど創作と絶縁せり。此年同人雑誌「語絲」の創刊あり。

一九二六年(四十六歳)、「呐喊」以後の諸作十一篇を集めて「彷徨」と題し、新書局より發行。最後に收めたるは前記の「離婚」たり、之れも烏合叢書中のもの。氏は「彷徨」の發行と共に小説と絶縁したる觀あるも、

氏の名聲は反て此時を契機として世界的に擴まり、同時に氏の身柄は一種の亡命状態となりて轉々せり。前者は「阿Q正傳」が佛のロマン・ローラン氏主宰の雑誌「歐羅巴」に譯載され、且つ感激的批評を加へられたることに基因し、後者は北京の段祺瑞政府が、魯迅氏を左傾派教授の一人に數へ、三月逮捕令を發し、それゆゑに氏は逃ぐるに急にして、折柄厦門大學の招聘に應じ、同地に渡航したるも、間もなく土地の頑固黨の反對に遭ひ、廣東の中山大學に移る。當時の感想は皆「語絲」誌上に發表さる。又北京にて彈壓を受けし時の攻撃文も名文として喧傳さる。

一九二七年、本全集の譯者は、「藥」「風波」「在酒樓上」「酒屋の二階で」を譯し、東京の雑誌に寄せたるも認むる者無し。又此前年滿洲の雑誌のために「狂人日記」を譯したるも紛失せり。

一九二八年、本全集の譯者は、上海日々新聞社の依頼に應じ、「阿Q正傳」「社戯」「村芝居」等を譯して同紙上に掲載。尙ほ「藥」以下二篇は上海の雑誌に發表。其頃「阿Q正傳」の英譯、獨譯もありと傳へらる。

一九三〇年、ロシヤ、レニングラード大學教授ワシリエフ氏等に依て、「阿Q正傳」「幸福の家庭」「孔乙己」「故郷」「頭髮の故事」「高老夫子」「高先生」「社戯」「村芝居」等の譯あり。又本全集譯者の「阿Q正傳」は此年雑誌「グロテスク」に轉載さる。當時魯迅氏は、上海に於て、左翼作家聯盟成り、「創造社」「太陽社」の未變節分子に推され其盟主となる。

一九三一年、國民政府の彈壓の下に、左翼作家聯盟員五名は逮捕されたるも、氏は辛くも免る。かかる中にも氏の名聲は益々高まり、其夏、ニューヨーク勞働者文化聯合大會に於て、支那側名譽主席に推さる。此

年、日本にては松浦珪三氏譯「阿Q正傳」「狂人日記」「孔乙己」等を二冊にして白楊社より發行、それと相前後して林守仁氏譯「阿Q正傳」四六書院より出づ。

一九三二年、佐藤春夫氏譯「故郷」と「孤獨者」は「中央公論」に現はれ、並に増田涉氏の「魯迅論」改造に掲載さる。魯迅氏は現在上海に居住し、五十二歳の男盛りである。

以上は魯迅氏の希望に依り、増田涉氏の、「魯迅論」、佐藤春夫氏譯「故郷」の後記「原作者に關する小記」に據るところ多し。

一九三二年十月

譯者識

(兩角製本)

昭和七年十一月十四日印刷  
昭和七年十一月二十日發行

〔魯迅全集〕 定價二圓

譯者 井上紅梅

發行者 山本三生

東京市芝區新橋七ノ一二

印刷者 村尾一雄

東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

(株) 會社 秀英 印刷 社

版權  
所有

發兌 改造社

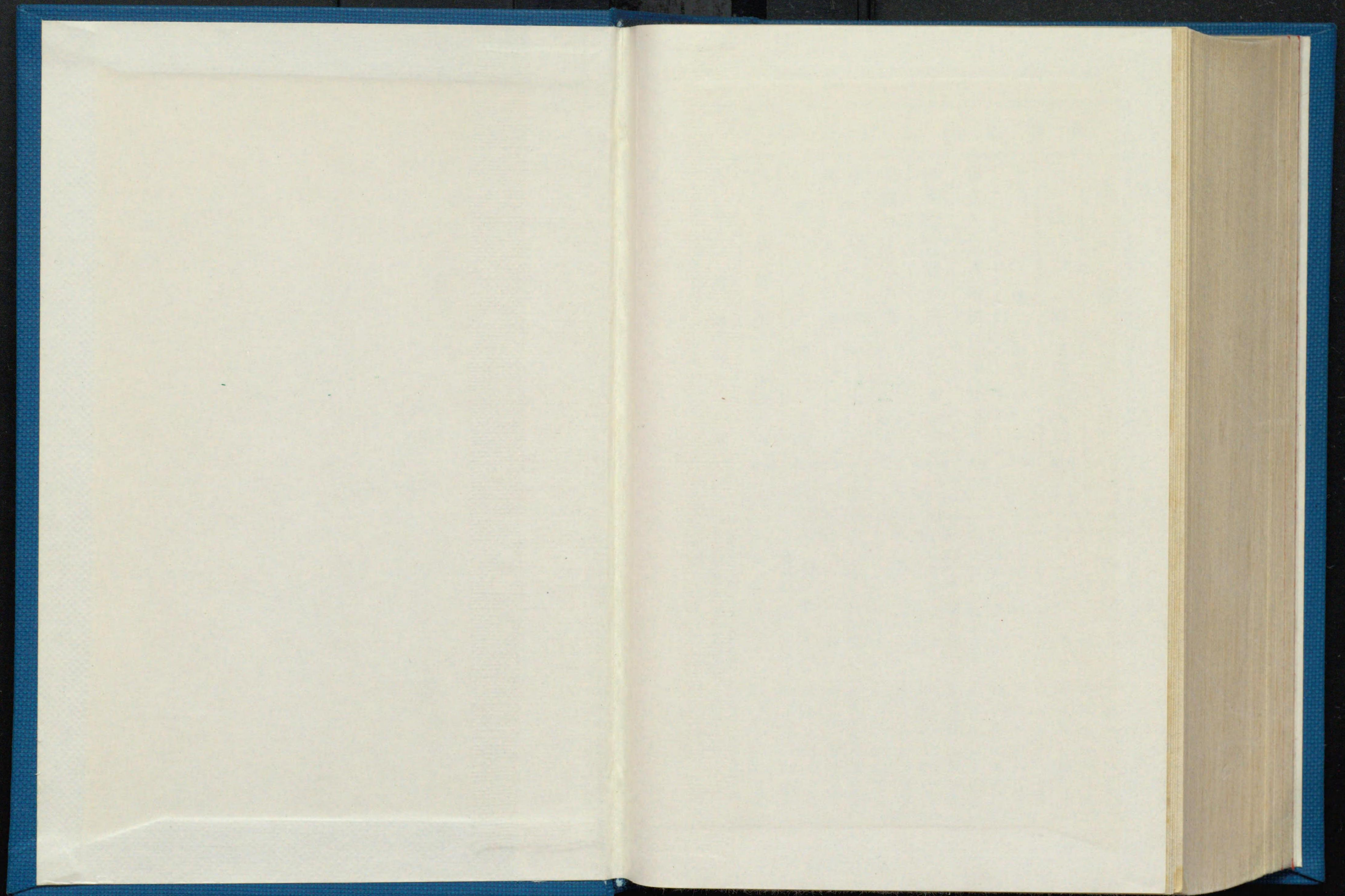
東京市芝區新橋七丁目十二番地

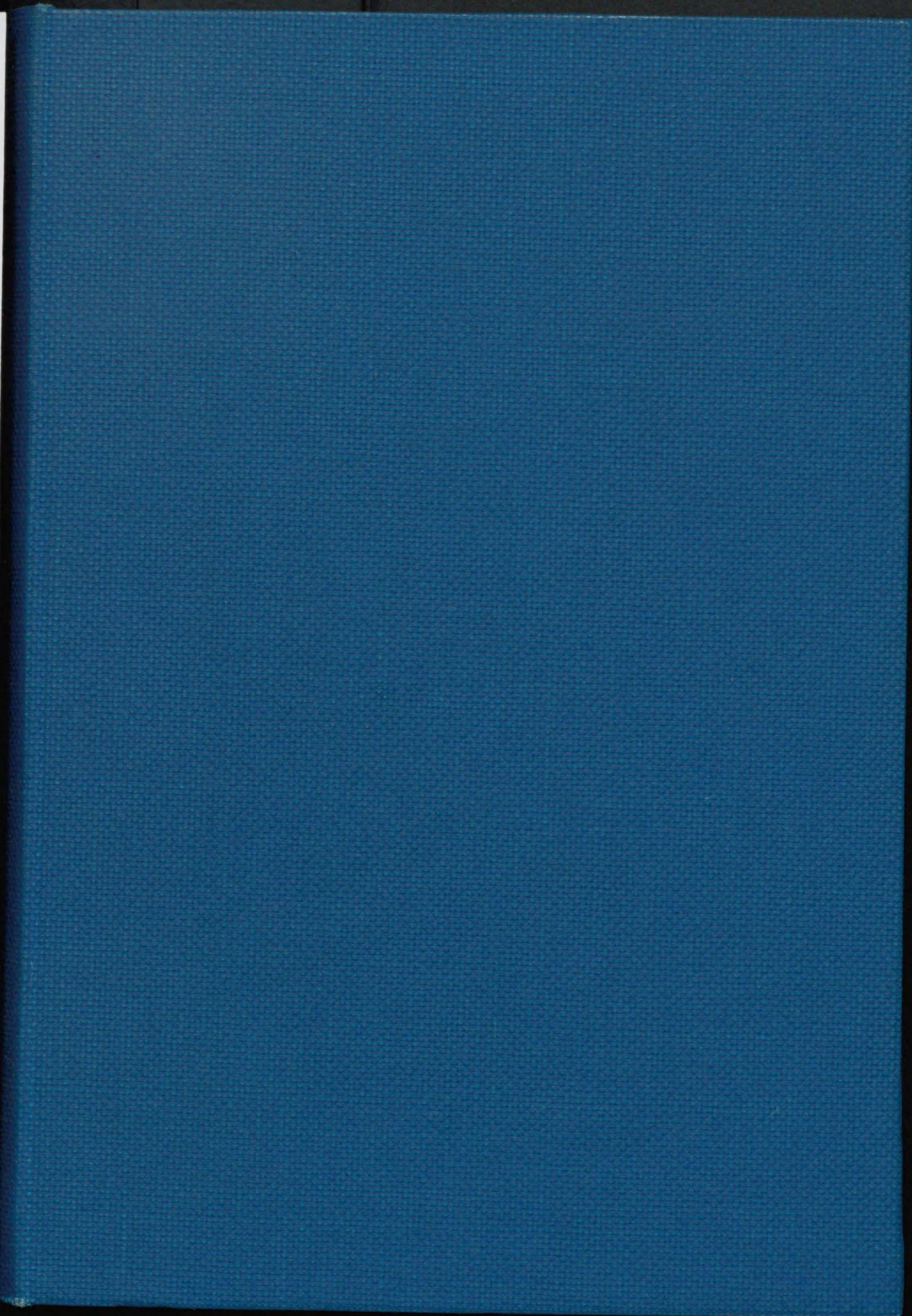
振替東京八四〇一番

電話芝(43)自一二二四番







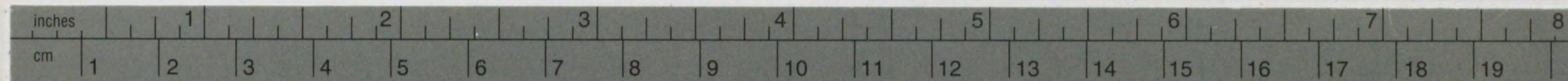
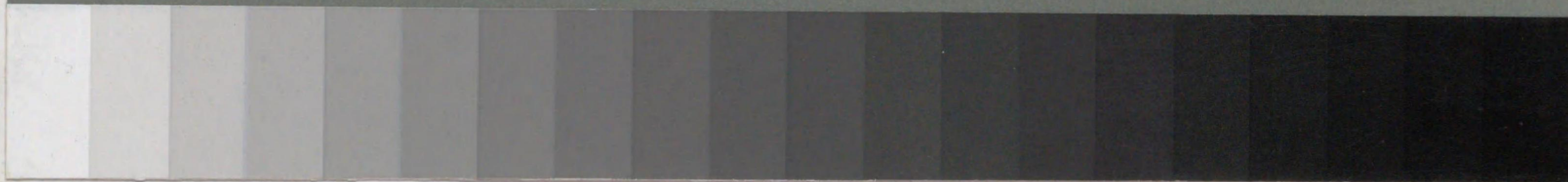


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

